



2016年度 中央大学ボランティアセンター報告書



中央大学ボランティアセンター 2016年度 ダイジェスト

2016年度は、これまでも取り組んできた東北での活動、大学内でのゴミ拾い活動、多摩での地域ボランティアの紹介に加えて、新たな被災地支援活動や防災活動、中央大学独自のボランティア講座が始まりました。

1 「公務員になりたい人のためのボランティア講座」 & 「地域発見！公務員と巡る五感で感じるバスツアー」

「公務員になりたい人のためのボランティア講座」は、特に公務員になりたい人を対象とし、これからボランティアをする前の意識づけを行うとともに、実際にボランティア活動に参加し、自分自身の体験を言葉にすることで、ボランティアの意義や魅力を実感してもらうことを目的として実施しました。

→詳細は64ページ



「地域発見！公務員と巡る五感で感じるバスツアー」は、大学周辺の日野市・八王子市にある、地域づくりの先進的な場所を訪れるとともに、そこで社会における様々な課題とその解決策を実施されている地域リーダーから直接話を聞くことにより、地域と学生との積極的なかかわりを推進していくことを目的として実施しました。

→詳細は65ページ



5月と6月に行った、「公務員になりたい人のためのボランティア講座」と「地域発見！公務員と巡る五感で感じるバスツアー」に参加し、その経験を10月に日野市で行われた市民活動イベント「まちづくり市民フェア」で、自身の経験と思いを発表した学生12人と、地域の受け入れ団体の方々と、一連の活動を振り返るまとめの会を行いました。

→詳細は66ページ



2

新たな被災地支援活動

～熊本地震・台風10号豪雨被害

平成28年熊本地震の発生を受けて、中央大学ボランティアセンターのよびかけにより「チームくまもと(チーム熊本より改名)」を結成しました。現地のニーズに柔軟に寄り添い、大学生の存在を活かし安全に配慮しながら現地ボランティア活動を行いました(第1陣は2016年5月21日活動スタート)。



→詳細は38ページ



岩手・北海道を襲った台風10号は、日頃からお世話になっている岩手県宮古市でも被害をもたらしました。そこで、宮古で活動するボランティア公認学生団体「はまぎくのつぼみ」所属学生の中から有志7人が、9月9日(金)～16日(金)の期間、宮古市災害ボランティアセンターに登録し、家屋の泥かき作業等、災害ボランティア活動を行いました。

→詳細は40ページ

3

防災活動

～チーム防災と教職員合同研修

チーム防災は、「学生×地域×防災」で自助・共助の力を高め、被災地と多摩地域をつなぐため、東日本大震災の被災地活動で学んだことを活かしたいという思いから、2015年夏に結成されました。



熊本地震においては、発災後に大学教職員と学生が協力して、迅速に避難者を受け入れた事例もあることから、その対応を担う主体は、学生自身でもあると認識され始めています。

「学内における防災訓練への関わり方」や「学内における災害対応への携わり方が分からない」という学生側の意見により、日ごろから学生自身が大学職員と一緒に学内で起こりうる危機とその対処法について考え、共通の認識を持ち、互いの連携を強化しておく必要があります。学生に対し大学運営者としての防災の考え方を提供してもらったイベントを企画し、対象者を学生だけではなく、教職員まで拡大しました。

→詳細は77ページ



【巻頭】 学生たちのボランティア活動：チームくまもと





【巻頭】 学生たちのボランティア活動：面瀬学習支援





【巻頭】 学生たちのボランティア活動：チーム防災



「気づきの機会」



商学部 経営学科2年
はまぎくのつぼみ 田中 瑠海

活動場所である岩手県宮古市は、美しい海と豊かな自然に囲まれています。現地を訪れるとその風景に見とれてしまうのと同時に、激しい揺れと津波が本当にここを襲ったのかと考えてしまいます。

私たちが宮古市で行ってきた活動は多岐にわたります。仮設住宅から災害公営住宅へ移り住まれた方と交流会を通してお話ししたり、震災の被害を受けても宮古で活動が続けている企業へ訪問させていただいたりしています。

こうした活動を行っていく中で、私は少しばかり焦りを感じていたのかもしれませんが、今年度から災害公営住宅の皆様と交流会を行ったのですが、夏の交流会ではこちらの不手際でゆっくりとお話をする時間を設けられなかったと感じました。うわべだけの交流に過ぎなかったのではないかと、そう自問することもありましたし、何が私たちの活動に不足していたのか考え反省しました。そこで、団体のメンバーから意見をもらい改善をくわえて2回目の交流会を企画しました。私たちの活動を覚えてくださる住民の方も多く、開始時間よりもずっと早くから会場にいらして楽しみにしていた方もいらっしゃいました。そのとき、私は交流会を通して「つながり」を創り出すことができたということを実感しました。団体のメンバーも最初は緊張した面持ちでしたが、現地の皆様が私たちに語りかけてくださることも多く、緩やかな「つながり」という絶妙な距離感こそ私たちが企画する交流会の意義ではないか、と思いました。

今年度団体の代表という立場を通して、私は長期的視点の必要性を感じました。現地で市の役所や社会福祉協議会の皆様とのヒヤリングから、宮古市は被災地というよりも課題先進地域という立場にあることを学びました。少子高齢化社会や過疎化という課題は日本全国に存在するものであって、被災地支援団体という型にはまって考えていたのは、実は自分だったのかもしれないと気づきました。被災地という言葉にとらわれてしまい、解決すべき課題は震災から数年という短期間で解決するものではなく、もっとずっと長い時間軸で考える必要があると私は思いました。さらに、地域のコミュニティ形成にも同様のことが言えると思います。先に述べた「つながり」は少しずつ構築されるものであり、常に相手に寄り添うことで形成されるのではないのでしょうか。今年度の活動を経て、私は被災地という言葉によって生じる先入観にとらわれすぎず目の前にある課題の本質を見出すことの重要性和その難しさを痛感しました。活動を通して行った課題発見とその分析、そして解決に向けた取り組みというサイクルを経験したことは自身にとって大きな力となりました。そうした気づきの機会を与えてくださった全てに感謝し、今後の活動に結びつけて参りたいと考えております。

「共に地域を盛り上げていきましょう！」



宮古市社会福祉協議会 相談員 黒柳 茂雄さん

平成29年2月で宮古市内すべての災害公営住宅が完成し、東日本大震災に関わるコミュニティも大きく変化する中で、学生の皆さんもこれからの復興支援活動への関わり方について非常に悩む年だったと思います。そんな中、住民からは「また中央大学の学生と会いたい!」、学生からは「地域の方々と深く関わり、災害公営住宅を含むコミュニティづくりについてもっと考えていきたい!」との想いを聞き、これからも若者の力が地域活性化の可能性を大きく広げることが強く実感しています。私たち社協もみなさんの想いが形になるよう、頑張っていきたいと思います。共に地域を盛り上げていきましょう!

「故郷が被災地と呼ばれることで学んだこと」



法学部 国際企業関係法学科2年
チームくまもと 木村 巨佑

私は熊本県熊本市東区出身です。震源となった熊本県益城町からは車で20分程の距離にあります。大学入学に伴って上京するまでの18年間を熊本で過ごしました。平成28年度熊本地震からもうすぐ一年が経とうとしています。

発災時、私は東京のアパートでテレビを見ていました。その途端に映り込む、緊急地震速報のテロップは私の体を強張らせました。震災によって、同じく東区にあった祖父母の家は大規模半壊の判定を受け、公費によって解体されました。

両親が共働きだったために、18年間、多くの日々を祖父母の家で過ごした私にとっても衝撃的でした。

私は、気仙沼市で活動を行う被災地支援団体にも元々所属させて頂いており、東日本大震災が気仙沼市に残した大きな傷跡も目にしてきたつもりでした。ですが、熊本で震災が起こって、暮らし慣れた祖父母の家が解体されて、ようやく震災による多くの喪失を抱えた気持ちが、僅かですが理解できるような感覚を得ました。

震災は理不尽なもので、住み慣れた家や他者との関係性、財産などを悉く奪っていきます。その話は熊本地震の前から、東北での活動を通して知っているつもりでした。ただ知っているだけで、本当に心から理解してはいなかったのだと、恥ずかしく思います。

今現在は、チームくまもとの一員として熊本での被災地支援活動に参加させて頂いています。完全に震災による被災者の方の心情を理解できるとも思いませんし、あくまで自分は第三者的な立場から被災者の方々と関わらせて頂くべきだと思います。しかし、いままでよりも、もっとしっかり被災者の方々と向き合っていくことで、“理解しよう”とする気持ちと行動がこれから必要になるのだと思います。

熊本での活動を通して、「まさか熊本で地震の起きると思わなかった。」「地震のせいで、家の潰れてしまった。」など多くの声を耳にし、実際にそのような光景を目にしてきました。そういった声や光景にしっかりと向き合うとはどういうことなのか。向き合った上で何ができるのか。そういったことを東京や現地において、団体や個人として考えていくことが今の自分がすべきことなのだろうと思います。

熊本で発災した震災は、直下型地震を理由としてか地域別や世帯別での被害程度やその後の影響の差が大きいように感じています。そのため、熊本県全体としての「復興」の大きなベクトルに、取り残され、自分の声を上げることのできない方もいらっしゃるのではないかと思います。あくまで推定に過ぎませんから、自分たちの熊本での活動を通していくことで実際に把握していきたいと思います。もしそういう人がいらっしゃるとすれば私たちは寄り添いながら継続的に活動を続けさせて頂きたいと思います。

「あなたも私も『はまらいんや』！！」



阪神高齢者・障がい者支援ネットワーク
代表 宇都 幸子さん

2016年10月9日 面瀬仮設住宅での芋煮会は仮設住宅自治会の実質的な解散会でした。芋煮会の終わりの時「はまらいんや」の皆さんのご挨拶に私の心も目頭も熱くなる思いであったことを忘れられません。それは面瀬仮設住宅での黒田裕子の厳しくも温かい指導が先輩から後輩へしっかりと受け継がれている姿であり、言葉であったからです。“寄り添う”“全体の中の個を視る”等、黒田が皆さんに伝えた言葉が中央大学ボランティアセンターの文化として、深く根づいていくことを願っています。“次の社会を担うのはあなた達よ”今も黒田はそう語りかけているに違いありません。

「地域に暮らすということについて」



文学部 人文社会学科哲学専攻2年
面瀬学習支援 大谷 夏子

団体の代表として過ごした今年度は、お世話になっている方々とお話しし、私たちが何をしたいのかを考え、伝える機会をたくさんいただきました。

夏に上沢三区の盆踊りに交えていただいたときや、ふれあい農園の運営委員会の方々、先生方とお話ししたときなどは特に、みなさんがどんな思いで、どんな場所をつくりたいのかということについて考えました。私たちの団体は、子どもたちの居場所をつくることを目指して活動していますが、子どもたちは、もともと地域のなかにある様々な「場所」のなかで生活しているということが改めてわかりました。振り返れば、自分が子どもだったときも、家族や学校、習い事での感じることやふるまいは、すべて違っていたと思います。そして、そのどれもが、今の自分をつくっているのだと思います。

それらの体験は、特定の人との間でだけでできるものではなく、まして、自分ひとりではできなかったものです。面瀬の子どもたちも、私と同じように、ある地域のなかで、家庭で過ごしたり、学校に通ったりしながら暮らしています。そのなかで子どもたちは、時がたつごとに大きく成長してだけでなく、地域の一員としてそのなかでたくさんの体験をしています。

また、子どもと大人、遊びと勉強といった、一見対立しているように見えるものも、本当はどちらか片方を選ばなければならないのではなく、よく理解できれば、どちらの立場にとっても良い場所をつくることができるのではないかと、思うようになりました。例えば、子どもは遊びたくて、学生は宿題をさせたいとき、どちらか片方が折れるのではなく、宿題のあと一緒に遊ぶ、ページを決めてやるというような約束をすれば、どちらも満足することができます。

もっと複雑な事態では、相手が何を求めているのか、考えているのかをきくことは難しいです。「大人は」「先生は」と、相手を立場でひとくくりにしてしまう経験は、だれしもあるものだと思います。その場その場で、相手に合わせてふるまいを変えるのはそのためでもあると思います。そのなかで、地域の外から来た、立場の定まっていない学生は、意思疎通の仲介になることができるかもしれません。

二年間の活動では、到底、子どもたちの周りにおける関係のすべてを知ることはできませんでした。私たちがどうあるべきなのか、個人としても、団体としても、たくさんの機会を通して、今後も学ばせていただきたいと思います。

「子どもを真ん中に」



一般社団法人プレーワーカーズ 理事
事務局長 神林 俊一さん

中央大学面瀬学習支援で開かれる子どもの居場所は、いつも大勢の子どもで溢れかえっています。それは、たった1度の関わりではなく、何度も関わってくれる思いのある学生が多くいるからでしょう。そして、子どもがなにかトラブルを起こした時に「それは禁止だ」「これはいけないんだ」と子どもの事を頭ごなしに否定するのではなく、そこにどう向き合うか一生懸命向き合い悩んでいる姿があるからこそ、その思いが伝わり子どもの暖かな居場所を作っているのだと感じます。そんな「子ども」を真ん中に見据えて活動している姿は、面瀬の子どもだけでなく地域の大人たちにとっても頼りになる必要不可欠な存在となっています。

「女川らしさ」

文学部 人文社会学科心理学専攻2年
チーム女川 岩立 文香



「復興を楽しむ。」

これは夏のスタディーツアーにて、女川で蒲鉾屋さんを営む高橋さんにお話を伺ったときに強く印象に残った言葉である。女川町は民間がまちづくりや復興を主導し、それを公民が連携して推し進めているという大きな特徴を持っており、高橋さんもその主導者の一人としてご活躍されている。

チーム女川として活動する前の私は、復興を楽しむものとは思っていなかった。女川は震災で甚大な被害を受けたため、まちを新たに作るというハード面での復興は大変な労力を必要とするものであり、地域コミュニティの再生や被災事業の再生など、ソフト面の復興も時間がかかるものと考えていたからだ。新たにまちをつくることが必要だった女川では、まちを再生するのではなく、前よりもっと良いまちにするべく挑戦することになった。より魅力的なまちをつくりたいという想いのもと復興の歩みは進められ、その想いがかたちになっていきつつある。昨年の12月に駅前にオープンした新たな物産販売施設であり、新たなまちの魅力の発信拠点となっている「ハマテラス」もそのひとつである。「あたらしいスタートが世界一生まれるまちへ。」というまちのスローガンも、女川のチャレンジ精神とまちづくりのビジョンをととてもよく表していると感じる。高橋さんをはじめとする女川のまちづくりを担っている方々にお話を伺うことで、何事も挑戦してみて、挑戦するからには楽しむという女川にもともとあった素地を復興にも活かしていることを学ぶことができた。またそれこそが女川らしさであり、まちの発展の幅を広げることに繋がっていることも知ることができた。

女川の方々はまっすぐにまちの将来を見据え、自分のまちのビジョンについて熱く、そして楽しそうに話される。女川町を愛するひとが楽しんで作ったまちは多くのひとを惹きつけ、訪れたいと思わせる。女川の魅力は美味しい海産物だけではなく、人であり、その人がつくるまちそのものであるため、それらをしっかりと伝えられるよう日々の活動でも意識して取り組んでいきたい。都内で女川の美味しいものをPRする活動を行うときにも、その美味しさの奥にあるまちの存在まで知っていただけるような方法を模索していくことが必要である。また、新しいことに挑戦し、その挑戦を全力で楽しむという女川らしさを様々な場での発信活動で伝えていけるよう私も活動を楽しみたい。これからも学ばせて頂いていることを最大限活かし、女川の「今」を発信できるよう頑張りたい。

「たくさんの出会い」

ダイシン&かふえさくら
島貫 洋子さん



6年前に起きた東日本大震災は、とてつもない不幸な出来事でしたが、私はそれにより沢山の素敵な出会いを頂きました。もちろん、中大生のみなさんとの出会いもそのひとつです！遠く女川まで来て頂き「生」の女川を学ぼうとする若い皆さんの姿勢には心から感謝しています。四年ほど前から皆さんに防災の体験談をしたりご飯を作ったりしています。とても素直で可愛い皆さんが来るのをいつも楽しみにしているんですよ。なんだか東京に甥っ子、姪っ子が増えていくようで嬉しいです。活動を続けていくことはいろいろ大変だと思いますが、心から応援しているのでこれからも頑張ってくださいね！

「被災地の今を東京でも活かすために。」



経済学部 公共・環境経済学科2年
チーム防災 青野 大志

2016年、大きな災害が起きた。4月の熊本地震である。私は九州の出身というわけではないが、やはりこのような大震災が起きた際自分にできることがあれば、積極的に行動を起こしたいと以前から思っていた。そこでまずは募金活動に参加し、中大内でも熊本に対する思いが広まっていき、実際に現地でも活動する動きが起こり「チームくまもと」が発足した。最初は報道で聞く限りの情報だけだったが、実際に現地に初めて訪れたときの衝撃はいまだに忘れられない。空港にもいたるところの壁にひびが入っていたり、避難所に向かう道中、様々な家屋が倒壊したりしていた。避難所では足湯のボランティアを通じて、そこで生活する方々の声を聞く活動を行った。最初はこれだけの被害に遭った方々にどのように接したらいいのか悩み、自分の思うように活動しきれなかったように感じた。しかし月に1回訪れることで、そこで生活している方々は本当に前を向いていて、また復活・復興するんだという思いが直に伝わってきた。その思いを最初は講演という形で中大周辺の他大学や高校で伝えていたが、そんな折「チーム防災」と出会った。そのメンバーの4年生も最初は東北の被災地で活動する団体に所属しており、その際防災の大切さを感じ、東京に戻ってから活動できるようにこの団体ができたという経緯を聞き非常に感銘を受け、私も地域の防災活動に参加するようになった。日野市に住む様々な自治体の方々は非常に防災活動に熱心で、小・中学校、高校でも防災教育の進んだ町であった。そのためただ避難訓練を行うだけでなく、避難所運営ゲーム（HUG）や災害頭上訓練（DIG）といった防災を学べるものがあるということを知り、HUGに関しては私が避難所を実際に見てきたことから、生の声で伝えることができ、それを地域住民のみなさんが受け止めてくださった。こうやって被災した方々の想いを、同じことが繰り返されないためにも、私が東京でそれを伝える活動が何より重要であり自分の役割でもあるように感じた。またこうして大学生が日頃から大学周辺の住民の方々と防災活動を行うことは、そこに世代を超えたつながりを作ることができ、そしてそのつながりこそが、もし何か起きたときに活かすことのできる大学生と地域の方々とのも大切な関係であると、活動を通して学び、感じたことである。実際そういうつながりを地域の方々も期待をしてくださっている。2017年はチーム防災の創設メンバーの4年生が卒業する。当初の想いを今後の後輩にどのように伝え、そしてこれから先何年も何十年も地域の方々に寄り添い信頼してもらえ関係を強固なものにしていくにはどうしていったらいいか、これから考えていかなければならない課題のように思う。

「チーム防災と共に歩む防災減災活動」



日野市社会福祉協議会
日野市ボランティア・センター 宮崎 雅也さん

私たち日野市社会福祉協議会は、東日本大震災を教訓に様々な方々との連携を深めるべく地域での防災減災活動に取り組んでいます。その中で、中央大学ボランティアセンターとの連携はとて重要に感じています。「チーム防災」のメンバーは、それぞれの被災地支援ボランティア活動を行なっている学生がメンバーになっています。一人ひとりが、被災した地域の現場を見て・聞いて・感じてきたことを持ち帰りその教訓を生かし活動を行い、丁寧に地域の方に向き合うことにより信頼を得ているところです。今後も私たちと共に地域と共に防災減災活動を進めて行く良きパートナーとして活動を続けて行っていただきたいと思います。

「ゼロからのスタート」

理工学部 人間総合理工学科2年
りこボラ！ 池田 木綿奈



私の夢は理工学部ボランティアセンター、通称ボラセンを作ることです。その考えに至ったことがこの一年学んだことの集大成と言えると思います。

振り返ってみれば、大学に入る前から私にとってボランティア活動は日常的なものでした。人の笑顔を見れば素直に嬉しく感じ、普段交流しない方と共に活動しながら様々な考え方を学ぶ。皆、その喜びを知っていると思っていました。それが覆されたのがこの大学に入学した時です。私は理工学部生ということから後樂園キャンパスに通っていますが、ボラセンは多摩キャンパスにしかありません。そのため多摩まで足を運び、1年間ボラセンが提供してくれた幾つかの活動に参加しました。しかし中大生の参加はあったものの理工学部生は明らかに少なかったのです。何故少ないのか。それには様々な理由があるとは思いますが、私が至った結論は「ボラセンがないから」でした。確かに大学に頼らずに活動をしている学生もいます。ただ1年生のうちに、未だ具体的とは言えない私の意志に合った活動を紹介していただき、そこから学んだことをより深く掘り下げることを指導され、次の行動の指針を示してくださったのがボラセンでした。理系でもボランティアを日常に、そしてそのためにボラセンを後樂園に。その思いから私は「りこボラ！」という団体を立ち上げ、ボラセンの学生スタッフ団体に登録していただきました。それが2016年の3月のことです。よって私の2016年度の活動は、まさにりこボラ！の活動を通しての意識改革とボランティアの必要性の証明でした。

それからは何を必要とされているかが明確な「単発の人力ボランティア」ではなく、りこボラ！という場所で自ら企画に回り「運営としてのボランティア」を行いました。大学を通じボランティアを行うことで、多くの人に必要性を気づいてもらうためです。確かに今までもNPOや大学が用意してくれたものに参加することで学んだことも多くありました。しかし企画に回ることで活動に責任を負い、結果も求められました。そのため具体的に活動を考える必要があり、そのヒントを求め社会との繋がりを必要とし、文京区の社会福祉協議会やNPO、CSRに力を注ぐ会社、他大学など多くの方と交流し、様々な考えを学ぶことができました。

多くの方のご厚意に感謝すると共に、そこから活動する文京区や大学に必要とされているものが見えてきました。それは今の大学で学ぶ科学技術がどの様に社会に活かせるのかを日々考えること。当たり前ではありますが、そのことによって社会人となった暁に学びがどう活かせるかが変わってきます。そのためにボランティアを通して社会を知り、相手の立場に立った考えを学ぶのだともいえます。こうして1年を通じ改めてボラセンの必要性を感じています。来年度も「理系でもボランティアを日常に」をテーマに掲げ活動して行く所存です。

「頑張るりこぼら！に踏み込む！」

文京区社会福祉協議会
地域連携ステーション フミコム 主任 根本 浩典さん



フミコムは、ボランティアやNPO、企業、大学が新たなつながりを創出して地域の活性化や地域課題の解決を目指す場所です。そのフミコムには、多くの大学生も踏み込んでいますが、特段中央大学理工学部の学生はよく見かけます。その大多数が「りこボラ！」の皆さんです。

フミコムを活用してもらって、ネットワーク強化や活動の幅を広げ、ボランティア活動のマイナスイメージをプラスイメージに変えていって欲しいです。少しでも「理系でもボランティアが日常に」の理念を実現させるお手伝いをしつつ、りこボラ！を応援する人を増やしていきたいです。

Contents

中央大学ボランティアセンター 2016年度 ダイジェスト	1
【巻頭】 学生たちのボランティア活動	
はまぎくのつぼみ 写真	3
チームくまもと 写真	4
はまらいんや 写真	5
面瀬学習支援 写真	6
チーム女川 写真	7
チーム防災 写真	8
「気づきの機会」	
商学部経営学科2年 はまぎくのつぼみ 田中 瑠海	9
「共に地域を盛り上げていきましょう！」	
宮古市社会福祉協議会 相談員 黒柳 茂雄さん	9
「故郷が被災地と呼ばれることで学んだこと」	
法学部 国際企業関係法学科2年 チームくまもと 木村 巨佑	10
「あなたも私も『はまらいんや』！！」	
阪神高齢者・障がい者支援ネットワーク 代表 宇都 幸子さん	10
「地域に暮らすということについて」	
文学部 人文社会学科哲学専攻2年 面瀬学習支援 大谷 夏子	11
「子どもを真ん中に」	
一般社団法人プレーワーカーズ 理事 事務局長 神林 俊一さん	11
「女川らしさ」	
文学部 人文社会学科心理学専攻2年 チーム女川 岩立 文香	12
「たくさんの出会い」	
ダイシン&かふえさくら 島貫 洋子さん	12
「被災地の今を東京でも活かすために。」	
経済学部 公共・環境経済学科3年 チーム防災 青野 大志	13
「チーム防災と共に歩む防災減災活動」	
日野市社会福祉協議会 日野市ボランティア・センター 宮崎 雅也さん	13
「ゼロからのスタート」	
理工学部人間総合理工学科2年 りこぼら！ 池田 木綿奈	14
「頑張るりこぼら！に踏み込む！」	
文京区社会福祉協議会 地域連携ステーション フミコム 主任 根本 浩典さん	14

刊行によせて

学生部長 中川 恭明.....	20
ボランティアセンター長 中澤 秀雄.....	21
ボランティアコーディネーター 松本 真理子.....	22
ボランティアコーディネーター 開澤 裕美.....	22

活動編

1. 被災地支援ボランティア

1. 東北支援学生団体	
はまぎくのつぼみ.....	24
はまらいんや.....	27
面瀬学習支援.....	30
チーム女川.....	33
2. 災害支援	
募金活動 多摩キャンパス.....	36
募金活動 後楽園キャンパス.....	37
(1) 熊本地震.....	38
(2) 台風10号水害ボランティア.....	40

2. 多摩キャンパス

1. 学内ボランティア活動	
「クリーン大作戦・春の陣」.....	42
「クリーン大作戦・秋の陣」.....	43
「クリーン作戦・ミニッツ〜30分間のゴミ拾い活動〜」.....	44
2. 防災ボランティア活動.....	45
3. 地域ボランティア活動	
(1) 国産大豆を子どもたちの給食へ！大豆プロジェクト.....	48
(2) ユギ里山ファーム.....	48
(3) せせらぎ農園.....	49
(4) 落川交流センター.....	49
(5) 日野新選組まつり.....	50
(6) みんなの遊・友ランド.....	50
(7) みんなと一緒にの運動会.....	50
(8) まちづくり市民フェア.....	50
(9) 夢ふうせんバザー.....	50

3. 後楽園キャンパス

1. りこボラ！.....	51
2. 学内ボランティア活動	
(1) 「ボラカフェ@後楽園」.....	53
(2) クリーン大作戦@後楽園.....	54
(3) 白門祭@後楽園キャンパス.....	54
3. 地域ボランティア	
(1) 新歓ボラ活動 花壇整備.....	54
(2) さきちゃんち 1周年記念.....	54
(3) 文京ボランティア市民活動まつり.....	54

報告編

4. 学内での活動報告事業	
1. ボランティア活動写真展.....	56
2. キャンパスライフ体験会（父母連絡会）.....	57
5. 学外での活動報告事業	
(1) 大学ボランティア活動写真展.....	58
(2) 明星大ボランティアシンポジウム.....	58
(3) 日本財団ボランティアセンター報告会.....	58
(4) 「大学生ボランティア活動報告パネル展&防災イベント」報告.....	59

学び編

6. 入門	
1. ボランティア講座	
【多摩】	
(1) 公務員になりたい人のためのボランティア講座.....	64
(2) 地域発見！公務員と巡る五感で感じるバスツアー.....	65
(3) ボランティア体験×学び 振り返りワークショップ.....	66
(4) 春休み、一歩踏み出したいアナタのためのボランティア講座.....	67
【後楽園】	
(1) 理工学部新入生ガイダンス.....	68
(2) 理工学部オリエンテーション.....	69
2. ボラカフェ.....	70
7. スキルアップ	
1. 「東北ミニシンポジウム～ 陸前高田から学ぶ ～学生は“地域の力”になれるのか～」.....	71
2. 「傾聴講座」.....	72
3. 神戸スタディツアー.....	73
4. 防災スタディツアー～石巻大川小から学ぶ～.....	74
8. 防災・災害	
1. 災害救援ボランティア講座.....	75
2. 公務員になりたい人のための！防災・災害ボランティア入門講座.....	76
3. BOSAI CAFÉ.....	77
4. 学生×教職員合同防災研修.....	77

資料編

9. 表彰状受賞学生	80
10. ボランティアセンター 利用集計	81
11. ボランティアセンターの取組記録	82

12. 協定・助成金	84
13. メディア掲載	
1. 大学関係広報誌	85
2. 新聞記事・広報誌等	86
3. メディア放送	87
14. 作成物掲載	
1. 刊行物	88
2. ポスター・チラシ	88
15. ボランティアセンター組織規約	
中央大学ボランティアセンター及びボランティアセンター運営委員会設置要綱	89
2015年度ボランティアセンター運営委員	90
ボランティア情報の取扱いに関する方針	91
団体登録シート	93

刊行によせて



学生部長 中川 恭明

2016年度中央大学ボランティアセンター活動報告書をお届けします。

今大学生にとって「ボランティアである」とは、いったいどのような意味を持っているのでしょうか。

一般社団法人日本私立大学連盟平成28年度学生支援研究会議での学生委員会学生生活実態調査分科会活動報告及び『多様な学生支援と課外活動支援の視点からの』問題提起において、「課外活動に積極的に参加している」(51.4%)の内、ボランティア活動は、2002年4.7%から2014年8.3に上昇したとの報告がありました。また、大学入学後のボランティア活動への参加比率が2002年17.2%から2014年28.8%に11.6ポイントも上昇し、活動内容の内訳は、「地域活性化活動」(27.7%)、「児童福祉関係活動」(26.3%)、「震災等災害関係活動」(19.2%)でした。重要なことは、こうした活動経験が学生生活に充足をもたらすということではないでしょうか。データが物語るところによりますと、「充実」81.9%、「普通」14.5%、「非充実」3.6%、他の課外活動と比較するとボランティア活動が学生に与える「充実感」・「充足感」は顕著であり、それは、次のようなところに見て取れます。「視野を広げ、ものごとを幅広く考える力」(ボランティア活動61.0%:課外活動全体52.3%)、「相手の状況や考え方を考慮して話をしたり、対応する力」(同55.5%):同48.1%)。ここに人間的成長の萌芽を見るのは早計でありましょうか。

中央大学のボランティアセンターでの活動は、果たしてどうでしょう。

先日、平成28年度日本学生支援機構優秀学生顕彰学内表彰式が举行されました。この賞は優れた業績を挙げた学生を奨励・支援することにより、21世紀を担う前途有望な人材の育成に資することを目的としたもので、本学からは、社会貢献分野で卓越した成果を挙げた学生が奨励賞を受賞しました。気仙沼市での漁業支援や仮設移転のボランティア活動の継続的な取り組みが、受賞の主たる理由でした。受賞後のスピーチで、『高校時代よりボランティア活動で何かをしたいという思いから中央大学に進学し、ボランティア活動の現場からの振り返りによってさらに学びの視点を深化させることができた。そのおかげで被災地再建に向けたインフラ整備に関わる職場で、被災地復興・再建に貢献したい。』と述べたのはまさに、ボランティア活動がこれからの大学という場での教育の一環として人間力向上に役立つものとなっていることの証左でありましょう。

また、日野社会福祉協議会主催の「第32回福祉のつどい」において「チーム防災」が2年連続で表彰され、「はまぎくのつぼみ」と「チーム防災」の活動が学員会会長賞を受賞したことも披露させていただきます。

今後ますます本学のボランティア活動が充実し、地域との連携を強化し、併せて大学間でのネットワークにより社会貢献が可能となりますよう、皆様方のご理解とご助力をお願いする次第であります。

■中川 恭明

(総合政策学部教授 専門分野/フランス言語学・社会言語学)

東京都出身。1979年上智大学大学院文学研究科フランス文学専攻博士課程満期退学。

東京工芸大学工学部助教授、中央大学総合政策学部助教授などを経て、2003年より現職。

『日本語と外国語との対照研究Ⅸ 日本語とフランス語 -音声と非言語行動』

(共著、国立国語研究所)、『語の選択』(共訳、白水社)。

2015年4月1日より学生部長に就任。

ボランティアセンター長 中澤 秀雄



中央大学ボランティアセンターとして3年度目の報告書をお届けいたします。被災地東北におけるボランティアセンターの活動は、これから細っていくのではないですか、と大学の重要な部局にいる方々からよく尋ねられます。もちろん、被災者が仮設住宅から災害公営住宅へと移転していく時期ですので、一つの区切りではありますが、これはコミュニティの作り直しとして地元で新たな課題を生んでいます。災害をきっかけに噴出した社会課題すべてが、「集中復興期間」が終わったからといって、突然解決することはありえません。1995年の阪神淡路大震災後に建てられた災害公営住宅でのNPO等による支援が、被災地神戸で今でも続いている事実をご存じでしょうか。災害は社会の弱い部分に襲いかかりますので、自力で復旧できる人はとくに前を向いて進んでいます。震災によって家庭や地域の環境が激変した子どもや、既存のコミュニティを失って孤立した高齢者などは、そういう訳には行きません。社会の弱い部分に光をあてないのは最近の日本の風潮ですが、ボランティアセンターは、あるいは大学の学問はそれで良いのでしょうか。

少なくとも本学の気仙沼市における支援は、地元の小学校・小学生や地域協議会から熱望されており、地域にとって当然の風景にすらなっています。面瀬小学校の校長先生は大震災後、3回交替しましたが、どの校長先生も「中央大学の活動は素晴らしい、続けてほしい」とおっしゃいます。また、岩手県宮古市は昨年の台風によって大きな水害被害を受けましたが、学生団体「はまぎくのつぼみ」はこの水害復旧にも駆けつけ、地元から一目置かれるようになりました。平成28年熊本地震のあと結成された学生団体「チームくまもと」も、西原村の避難所として仮設住宅で活動を続けています。東北での学びを東京に持ち帰った「チーム防災」は日野市や日野社協、さらに日野の各自治会の皆さんと協働し、多摩キャンパスの地元にとってなくてはならない存在になりつつあります。豊田駅前のイオンモールでの写真展も3年連続で実施させて頂き、温かい応援の声を頂戴しております。東北・熊本・多摩・後楽園でお世話になっている皆様に、この場をかりてあつく御礼申し上げます。

教育・環境・農・福祉・まちづくりなど、ボランティアとして通常イメージされる諸活動についても、多摩および後楽園の地元の皆様からご支援をいただき、順調な発展を見せています。山科満教授のご尽力により、4月からは文学部に「ボランティア論」が開講されます。学生部が定期的に行っている「学生生活実態調査」において、ボランティア経験者の割合は前回調査からほぼ倍増となりました。「中央大学社会貢献・社会連携推進会議」においてボランティア活動は、大学の第三のミッションである社会貢献の柱として位置づけられています。私学助成のポイント換算の上でも無視できない意義を持っていると聞いています。

しかし、以上のような達成にもかかわらず、本センターは未だに安定した存在ではありません。皆様に、更なるお力添えをお願いする次第です。

■中澤 秀雄

(法学部教授 専門分野/政治社会学・地域社会学)

東京都出身。1994年東京大学卒。2001年東京大学から博士(社会学)の学位を取得。札幌学院大学社会情報学部講師、千葉大学文学部准教授を経て2009年から現職。日本社会学会、地域社会学会等に所属。主著は新潟県の新潟問題を抱った『住民投票運動とローカルレジーム』(ハーベスト社)や廃棄物・原子力・環境文化等のテーマを幅広く扱った『環境の社会学』(共著、有斐閣)など。前者により第5回日本社会学会奨励賞、第32回東京市政調査会藤田賞などを受賞。2012年4月1日より学生部ボランティア担当委員に就任。

ボランティアコーディネーター 松本 真理子

センター設立4年となりました。センター1期生とも呼べる、設立年に入学した学生が卒業しました。学生は、行政や都市計画コンサルティング会社、大学院など、それぞれ、ボランティア活動を通じて学んだことを生かす道へと進むことになりました。この4年間、学生の成長を見守り応援くださった地域の皆様には心より感謝申し上げます。

2016年度は4月14日熊本地震発生により、年間計画の想定外の活動から始まりました。「何かしたい」という学生が窓口に詰めかけるも、余震が続いたことからまずは募金活動を行いつつ、コーディネーターらで現地視察し活動を探りました。センターが東北の活動で学んだことは、復興には数年の時間を要するので、少数でも通い続け、現地の人と顔の見える関係を築きながら変化に合わせた活動をしていくことの大切さです。5月から出身学生らで「チームくまもと」を結成し、西原村に通っています。

他にも、後楽園キャンパスに「りこボラ！」が誕生し理工学部生による文京区での活動が広がったこと、多摩キャンパス周辺の里山や農園活動に継続して参加する学生が生まれたこと、「チーム防災」は益々地域から依頼が増え、学内でも「学生教職員合同防災研修」を開催したこと、そして何より東北の活動に参加する学生が増えたことなど、より活動の幅と層に厚みが増した年でした。

学生は4年で卒業しますが、学びと人の繋がりを後輩たちに引き継ぎながら、中央大学のボランティア活動として途切れることなく、これからも地域の方々と歩みを揃えながら活動を続けていきたいと思えます。



■松本 真理子 (中央大学ボランティアセンター ボランティアコーディネーター)

千葉県船橋市出身。2004年明治大学政治経済学部卒。船橋市二和公民館、コミュニティ紙の記者、地産地消イベントプロデューサーなどを経て、2011年9月より宮城県女川町にてNPOカタリバ運営「女川向学館」広報・地域コーディネーターとして復興支援に携わる。2013年より現職。2016年より中央大学法学部兼任講師。

ボランティアコーディネーター 開澤 裕美

センター設立4年目となる2016年度は、ボランティアをしたいという新生や学生がこんなにいるんだ、ということを実感した4月からスタートしました。東日本大震災から5年目という節目であることに加え、新年度が始まったばかりの4月14日に発生した熊本地震が大きな契機となり、センターは「自分にできることを何かしたい！」という学生で溢れました。

「できること」は無限にあります。現地へ行って直接お手伝いをするのはもちろんのこと、募金の呼びかけ、寄付、情報発信、物産展、観光で訪れる。一人ひとりが自分の「今できること」を考え、行動し、忘れず、次に活かす。改めて、様々な背景や事情を抱える集団である大学ボランティアセンターとして、学生の可能性とそれを現実させていく醍醐味を味わえた一年でした。

また、2016年度の新たな取り組みである「地域発見！公務員と巡る五感で感じるバスツアー」の実施により、多摩キャンパス周辺の地域活動との繋がりがより深まった一年でした。学生にとって、地域で活躍されている魅力的な大人と居心地の良い現場との出会いは、これまで電車で通り過ぎ、生活するだけであったただの場から、多くのものを学び得るかけがえのない場となりました。

学生を受け入れてくださり、一緒に育ててやろうという現場の皆さんのおかげで、センターでは活動を継続することができます。心から御礼を申し上げます。今後も、社会の課題を自ら発見し、現場へ足を運ぶことで「他人事」を「自分事」と捉え、自分のできることから柔軟に歩いていく。そんな草の根となり社会を創造的に築いていける人財を育てられるセンターであるべく、尽力してまいります。



■開澤 裕美 (中央大学ボランティアセンター コーディネーター)

京都府宇治市出身、同志社大学法学部政治学科卒業。国際ボランティア活動を企画・運営するNPO法人で関西事務局を立ち上げた後、CSR（企業の社会的責任）のコンサルタントを経て、2015年4月より現職。NPO法人NICE（日本国際ワークキャンプセンター）副代表・理事も務める。

活動編

1. 被災地支援ボランティア

1. 東北支援学生団体

団体の紹介：はまぎくのはつぼみ

理念

私たち「はまぎくのはつぼみ」は岩手県宮古市を拠点として活動しています。「はまぎく」とは宮古市の花であり、花言葉は「逆境に立ち向かう」です。宮古市は過去に数回津波の被害を受けてきましたが、その度に立ち上がり、東日本大震災にも屈することなく、復興を遂げようとしています。団体メンバーひとりひとりが「宮古の未来のために学生の自分たちには何ができるのか」を真剣に考え、自分の意見を出してみんなで話し合い、復興のお手伝いをしています。「つぼみ」は団体メンバーや活動参加者ひとりひとりを表しています。一人の力は小さなものですが、みんなの力を合わせることで、いつの日か宮古に満開の花が沢山咲くことを願っている、という思いがこの団体名に込められています。

現在、震災から年月が経ち、復興への思いや防災の大切さも風化してきています。私たちは、現地で震災当時や現在の復興の状況、防災について学んだり、学童の子供たちと触れ合ったりし、それを写真展や報告会などで発信することで、震災を忘れることなく将来に繋げていきたいと思っています。このような思いを忘れず、支援して下さる方々への感謝とともに、私たちは活動しています。

活動場所

岩手県宮古市

代表者

田中瑠海（商学部2年）

所属メンバー

大上拓紘（経済学部4年）、吉田沙織（法学部3年）原ゆり子（法学部3年）、岩元理佐子（法学部2年）、寺崎友莉（法学部2年）、奥野日香梨（法学部2年）、木下卓哉（商学部2年）、伊志嶺朝希（商学部2年）、石川海歩（経済学部2年）、佐々木星（文学部2年）、平田祐（文学部2年）、小谷彩夏（文学部2年）、阿部妃南子（文学部2年）、竹内千晴（法学部2年）、平田祐（文学部2年）、山崎弘貴（法学部2年）、横矢亜実（法学部2年）、米光遥（法学部2年）、伊藤啓市（経済学部1年）、糸日谷菜菜（法学部1年）、加藤みすず（文学部1年）、桑田百合子（文学部1年）、今野陽介（総合政策学部1年）、高橋俊（法学部1年）、高橋彩（法学部1年）、林莉佳子（法学部1年）、日高あきら（文学部1年）、福原一美（法学部1年）、細川まい（文学部1年）、松井亜美（法学部1年）、峯村雄大（法学部1年）、茂木彩花（文学部1年）、山周平（商学部1年）

活動先・協力先

宮古市役所、宮古市社会福祉協議会、銚ヶ崎学童の家

夏の活動

8月3日～8月7日 10人

8月25日～8月29日 8人

9月3日～9月7日 12人

冬の活動

12月25日～12月27日 5人

春の活動

2017年3月15日～3月18日 15人

活動内容：学童保育での学習支援、田老地区でのフィールドワーク、市役所でのヒアリング、社会福祉協議会でのヒアリング、物産展販売商品の製造元へのヒアリング

支 援 先：中央大学学員会、日本財団学生ボランティアセンター

都内での活動

9月25日（日） 22人

場所：八王子市生活実習所

内容：岩手復興支援物産展の開催

10月23日（日） 21人

場所：中央大学 多摩キャンパス

内容：岩手復興支援物産展の開催、写真展の実施

11月21日～11月25日 16人

場所：中央大学多摩キャンパス 生協店舗1階

内容：岩手復興支援物産展の開催

2017年2月11日～12日 16人

場所：イオンモール多摩平の森 4階イオンホール

内容：岩手復興支援物産展の開催

「この一年間の活動を振り返って」

岩元理佐子（法学部法律学科2年）

はまぎくのつぼみの今年度の活動の変化及び課題は、主に団体の人数増加による運営の変化、岩手県宮古市の復興に伴う活動内容の変化の2点が挙げられます。

まず、1点目の団体運営の変化についてです。4月の新入生歓迎活動の結果、昨年度と比べ1年生・2年生ともに意欲のある団体のメンバーが大幅に増加しました。それに伴い、今年度は団体内で役割分担を行うことで効率的な運営を行ってきました。人数の増加により、現地での活動や東京で行う物産展等の活動を以前にも増して活発的に行うことができました。一方で、団体内でのスムーズな意思疎通や共通の意識の共有が難しくなるという問題も発生しました。従って、今後の団体運営の課題は、活動の中で団体内での意見交換や団体について一人一人が考える時間をいかに確保するかということです。なぜなら、そのような時間を確保し団体について考えた意識は、今後の活動を行う上で重要な支柱になるからです。

続いて、2点目の活動内容の変化についてです。今までの活動と大きく異なる点は、仮設住宅の集会所での活動から災害公営住宅の集会所等での活動に変化したことです。宮古市では東日本大震災から5年を経て、住民の方の仮設住宅から災害公営住宅等への転居が進みました。そこで、宮古市社会福祉協議会から協力を頂き、新たに津軽石地区の公営住宅の集会所等において夏季・冬季休暇にそれぞれ一度ずつサロンを開催しました。私たち学生が住民の方々の間に入ることで住民同士の交流の契機になることを目標にサロンを行っています。その理由は、

1. 被災地支援ボランティア

公営住宅には元々津軽石地区にいた方やそうでない方が居住しているからです。宮古市が現在抱える問題は、目に見える公営住宅や防波堤の建設だけでなく、災害の影響で弱まってしまった地域コミュニティの再建もあると感じています。そのため、はまぎくのつぼみと言う学生団体としての課題は、地域内で人と人との繋がりを深めるために、「どのような活動を行うべきか、何が必要とされているのか」を常に考えながら活動することです。

今年の3月11日で東日本大震災から6年が経ちます。6年という歳月で宮古市も徐々に復興が進んでいます。私たちは、復興の進む宮古市に定期的に訪れるとともに、東京での「伝える」活動を続けることで、今後も宮古市の姿を見守り続け、人に寄り添うような活動を続けていきたいと考えています。

「一年を通して感じたこと」

日高あきら（文学部人文社会学科哲学専攻1年）

はまぎくのつぼみとして活動してきた一年は新たな経験ばかりであった。

ボランティア経験がほとんどなかった私は、はまぎくのつぼみに参加して初めて被災地を訪れた。活動していく中で感じたのは、実際に現地を訪れることの重要性である。なぜならメディアからの情報だけでは知りえないことが現地にはたくさんあるからだ。例えば、現地で社会福祉協議会の方にヒアリングをした中で、被災地支援のニーズが震災支援からコミュニティ支援へと変化してきていることを知った。テレビなどを見ている限りでは知らなかった変化だった。また、コミュニティ支援とは地域のコミュニティを形成することが目的であるため、長期的な活動が必要になり、現地に赴かなければ達成できないことである。なので、被災地に実際に行って活動することが最も重要であると感じた。

現地に訪れることが第一であるが、はまぎくのつぼみの活動はそれだけではない。我々の活動の特徴として、東京で物産展を開催している、ということが挙げられる。物産展を経験し始めたころ、商品が売れるという目に見えた成果があるため、どうしても商品を全て売ることが目標になってしまいがちであった。しかし、それでは我々の活動に全く結びついていないことに気づいた。被災された企業の方々の体験や思い、宮古の現状、我々の活動を東京の方に知ってもらうことが物産展を行う最大の意味であるのだ。東京で活動していても宮古市のための活動であることを常に意識することが必要であると学んだ。

はまぎくのつぼみは学生団体である。“団体”で動くということは個人でボランティア活動をするより大変なことも多い。人数が増え団体の規模が大きくなればなおさらである。しかし、学生団体であるからこそその強みもあると思う。学生の長期休みを使って活動ができるし、世代が交代していくことによって、現地に求められている継続的な活動が可能である。また団体として活動するので、イベントなどを通してたくさんの方々との交流できたり、様々な視点からものごとを考えられることも強みである。

このようにはまぎくのつぼみでの活動で学んだことは多い。震災から六年経った今、我々の活動にも変化が求められるが、一年間はまぎくのつぼみとして活動して得た経験と学生団体特有の強みを今後の活動に活かしていきたい。

団体の紹介：はまらいんや

理念

震災をきっかけにさまざまな日本社会の問題が露呈しました。その問題は医療、福祉、居住環境まで多岐に渡りますが、被災者の方が必要とするものはそれぞれ違います。本当に人間らしく生きるためには何が必要でしょうか。

極寒の雨漏りする家で暮らせますか？

草が生えてくる家で安心して眠れますか？

暮らしは肉体、精神ともに直接大きな影響を与えます。

周囲に話せる相手がいなかったらどうしますか？

重病の時に自分だけだったらどうしますか？

仮設住宅のような外部と孤立しがちな環境ではコミュニティの場が絶たれ、時に孤独死が発生します。コミュニティ作りとその意地が必要とされ、地域的な結びつきは自立の助けとなります。

私たちの活動や一緒に過ごした時間が少しでも住民の方の支えとなり、震災で傷を受けながらも前を向いて生活できるよう、以下を団体理念として掲げています。

その「人」「地域」「暮らし」に焦点を当てた「人間主役のボランティア」であること、そして住民の方の「今日を生ききる力になること」。「人」「地域」「暮らし」上記3点は、本当に人間らしく生きるために必要なことなのです。

活動場所

宮城県気仙沼市面瀬中学校仮設住宅

代表者

木村亘佑（法学部2年）

所属メンバー

手塚文裕（法学部4年）、志賀未希（文学部3年）、塚田かえで（文学部3年）、中村香織（文学部3年）、木村亘佑（法学部2年）、白須花恵（法学部2年）、赤間環（法学部2年）、儀保みずず（商学部2年）、登倉めぐみ（文学部2年）、中山桜子（法学部2年）、村瀬暁純（法学部2年）、生田弓夏（文学部1年）、小林可奈（法学部1年）、今野清楓（経済学部1年）、千葉麻由（文学部1年）

活動先・協力先

面瀬中学校仮設住宅自治会 尾形修也会長

夏の活動

8月28日～9月4日 7人

活動内容：集会所でのお茶会、語らい、住宅訪問、夏祭りイベントの補助

支 援 先：中央大学学員会

秋の活動

10月7日～10月10日 5人

活動内容：集会所でのお茶会、語らい、住宅訪問

冬の活動

12月25日～12月29日 7人

活動内容：集会所でのお茶会、語らい、住宅訪問、年越しイベントの補助

1. 被災地支援ボランティア

支 援 先：中央大学学員会

春の活動

3月22日～24日 7人

活動内容：集会所でのお茶会、語らい、住宅訪問、追悼集会の運営補助

支 援 先：中央大学学員

その他活動

団体理念の勉強会

内容：先輩方の作った団体理念は初動期の活動に基づいて作られていたため、活動を引き継いだ代にその概念や背景が伝わりきれいではなかった。そこで、文献の読み合いを行ったり先輩から話を聞いたりして、今の団体の活動理念が作られた背景を現役のメンバーの間で共有し、自分たちの活動の客観的な意味づけを行った。

1年生のための勉強会

内容：初めて活動に参加する1年生に向けて、事前学習を行った。はじめは気仙沼の文化・産業と震災当時の様子について1年生に自ら調べてきてもらい、発表会を行った。仮設住宅で住民の方々と語らいをするときに、少しでも前提知識があった方が会話しやすいと思い、実施した。また、上級生から1年生に、ボランティア活動を行う上で気を付けてほしいことを伝えた。上から目線にならないように、押しつけのボランティアにならないよう常に相手のニーズを探りながら活動することなどを伝えた。

傾聴講座

内容：お茶会や訪問活動など住民の方々と向き合ってお話しさせていただくことが多い当団体にとって傾聴の姿勢を身に付けることは極めて重要であるとの事から傾聴講座を能力開発センターの後庵正治先生をお招きして行った。相手の表情や仕草をよく観察してお話を伺うことや、話を聞く際の態度や相槌の打ち方など留意すべき事を教えていただいた

現地視察

内容：現在活動させて頂いている面瀬中学校仮設住宅の集約を前に、集約後の活動の参考のために現地視察を行った。面瀬中学校仮設住宅からそう遠くなく、住民の方々の多くが転居を予定されている、鶴巻二区の復興団地を見学した。加えて、震災遺構としての保存が予定されている向洋高校を見学したり、津波による被害が大きかった階上地区の杉の下高台の慰霊碑を訪れ、先輩からの話を聞いた。

「この二年間を振り返って」

白須花恵（法学部国際企業関係法学科2年）

大学入学当初からなんとなくボランティアがしたいと思っており、たまたま東北学院大学主催の被災地ボランティアに参加したのがきっかけでした。このボランティアに参加して、「団体」に興味を持ち、そんな時にたまたまメーリスで流れてきたのが「はまらいんや」でした。

はまらいんやの活動は私が今までイメージしていたボランティアとは全く違っていました。主な活動は宮城県気仙沼市面瀬地区にある仮設住宅で住民の方々とお茶会をしたり、お茶会に来られない方の家に訪問させていただいたりすることです。この団体に入って学んだことは大きく二つあると思います。一つ目は継続することの大切さです。住民の方々は初めて伺う私のことも温かく迎えてくださいました。それは震災当初から継続的に活動してきた先輩方がいた

からこそだと思います。先輩方をお呼びしたシンポジウムなどを通して、時間の経過とともに現地の解決すべき問題も変化することを知りました。継続的に活動してきた団体だからこそ気付けることなのだと思います。二つ目は目的を明確に持つことの大切さです。団体の活動の目的はコミュニティ支援で、成果が目に見える形ではわかりません。仮設に行くたびに自分のほうが元気を頂いてしまって、自分が行って何か役にたっているのか不安になることがあります。それは目的意識を持っていなかったからだと思います。入団した経緯からも分かるように普段は何も考えていないため、活動前のミーティングで個人の目標を考えたり、それを団員のみに突っ込まれながらより明確にしたりすることはとても苦痛でした。しかし、一人では届かないところまで一緒に考えてくれる人がいることはとてもありがたいことだと思います。自分の目標を明確に持つと、活動が終わった後に振り返り比較することができます。そうすることでただの自己満足で終わらせず、次の活動や自分の成長に繋げていけるのだと思います。

震災から六年が経ち、住民の方々は仮設住宅からそれぞれの場所へ移動が始まりました。そのため仮設住宅で先輩方が築いてきたコミュニティが分断し、新しくつくる必要が出てきます。今まさに、団体がどのような方向に進むのか模索中です。ちょうど節目の時期で大変はありますが、最後まで関わらせていただきたいと思います。そして先輩方が繋げてくださったように次に繋いでいきたいと思っています。

「宮城県気仙沼市を訪れて感じたこと」

生田弓夏（文学部人文社会学科社会学専攻1年）

私がボランティア活動に参加することに決めたのは、人の役に立ちたいという思いがあったからです。友人が「はまらいんや」の一員として参加していたこともあり、心の中で人の役に立ちたい、という思いを抱き続けるだけでなく、私も実際に行動に移してみようと思いました。私は「はまらいんや」の活動拠点である宮城県気仙沼市には訪れた経験もなく、知らない土地で活動することに対して不安もありました。私が初めて気仙沼市を訪れたのは、昨年の12月26日から28日にかけて企画されたスタディツアーです。現地を訪れてみて、一面あたりを見回せるほどまだ何も建物がない場所を目にし、震災発生時よりメディアが現地の状況を報じる機会が減った今も復興はまだまだ途中であることを実感しました。スタディツアーではボランティアステーションや市役所、ふれあい農園に行き、私たちが普段東京で生活し、資料を読むだけではわからない現地の状況や、現地の方々が地域の方と関わる中で感じた課題について伺いました。私は、今回様々な方にお会いし、お話を伺う中で皆さんのあたたかいお人柄を感じました。仮設住宅に伺わせて頂いた際も、ご家族と先輩方は以前から交流を深められていましたが、初めて訪れた私にも同じようにやさしく接し、震災当時の様子や自身の経験談を丁寧にお話しして下さり、人柄のあたたかさを感じるとともに、「はまらいんや」に所属し活動されていた代々の先輩方が築いてきた現地の方々とのつながりや信頼を感じました。お話を聞いた上で、資金や活動時期など様々な制限がある学生の私たちが出来ることはあるのだろうか、と考えましたが、学生だから出来ない、という考えではなく、学生だから出来ることを積極的に考え、行動することが大切だと思いました。また、学生としてというだけでなく、私だから出来ることは何か考え、活動に参加する姿勢が大切だと思いました。ボランティアの対象となる方々のことを第一に考え、これからも活動していきたいと思っています。

団体の紹介：面瀬学習支援

理念

～「第3の場」を開き、大学生だからこそできることをする～

- ①学校とも家庭とも違う子どもたちのための場を開く。
- ②子どもたちの将来の選択肢の幅を広げ、気仙沼・面瀬の未来の担い手を育む。

私たちが対象としているのは、面瀬小学校に通う児童たちです。私たちは2012年から子どもたちがリラックスして勉強したり遊んだりできる場を開いてきました。震災から4年を経た今の気仙沼では日本の抱える問題がより露呈しています。そこで、まずは自分たちが変えていけるところから少しずつ変えていこうと考えました。それは、今までの活動で築いてきた学校や子ども、保護者、地域との信頼関係がある面瀬に継続的に関わり、その地域でわたしたち外の地域から来た大学生にしかできないことをやることです。それが大学のない気仙沼で、子どもたちに学校の先生でも家庭の中の親でもない大学生と関わる場をこれからも開き続ける意味です。

よそから来た大学生にしかできないこととは、自分たちが東京で経験してきたことを話すことにより子どもたちの見聞を広め、将来の選択の幅を広げ、最終的に様々な場面・分野で活躍し、地域の誇りとなるような人を育てる一助となることです。

それに加え、地域学習の場を作り地域の魅力を知る機会を設け、最終的に地域に貢献するような人を育てる一助となることも目指します。

地元での生活と仙台・東京といった都市部での生活。様々な選択肢を知った子どもたちが、将来地元や気仙沼を思いながら都市部で活躍する大人になり、その結果気仙沼の復興・発展につながることを目指します。

活動場所

宮城県気仙沼市面瀬地区

代表者

大谷夏子（文学部2年）

所属メンバー

安達麦穂（文学部4年）、田中結衣（文学部3年）、森美紗子（法学部3年）、松本紗季（法学部3年）、大辻みずき（文学部3年）、金野ひかり（経済学部2年）、大谷夏子（文学部2年）、浅川瑛里菜（経済学部2年）、山本純司（商学部2年）、栗原夏海（経済学部2年）、高本翔太（経済学部2年）、村越博行（経済学部2年）、荒瀬可純（文学部2年）、平井翔子（文学部2年）、櫻井里南（文学部2年）、石山賢斗（法学部1年）、岩井謙太郎（経済学部1年）、梅森隼（総合政策学部1年）、釘嶋結生（法学部1年）、眞田開（商学部1年）、竹井希実（法学部1年）、綱澤麻有（文学部1年）、常盤真菜（商学部1年）、中和恭佑（経済学部1年）、向山碧杜（法学部1年） 筋内美保（商学部1年）

活動先・協力先

気仙沼市面瀬小学校 上沢自治会長 高橋紀一氏

夏の活動

8月16日～8月24日 24人

活動内容：学習指導、フェンシング、ふれあい農園遊び、お楽しみ会

支 援 先：住友商事東日本再生ユースチャレンジ・プログラム、中央大学学員

冬の活動

12月22日～12月30日 20人

活動内容：学習指導、ふれあい農園遊び、スポーツ大会、郷土かるた、お楽しみ会、白玉作り

支 援 先：住友商事東日本再生コースチャレンジ・プログラム、中央大学学員

春の活動

3月23日～31日 15人

活動内容：学習指導、ふれあい農園遊び、お楽しみ会

支 援 先：住友商事東日本再生コースチャレンジ・プログラム、中央大学学員

事前調査

7月2日～3日 12人

内容：夏季ボランティア活動の事前調査

ヒアリング先：面瀬小学校 熊谷久恵さん

気仙沼市議会議員 今川悟氏

支援先：住友商事東日本再生コースチャレンジ・プログラム、中央大学学員

「今年度の団体活動を振り返って」**荒瀬可純（文学部人文社会学科教育学専攻2年）**

今年度の活動の一部の紹介とそれに伴う団体内部の変化、今後の課題の3点を述べたいと思います。

初回の活動は、「はまらいんや」と合同で行った新規メンバー向けのスタディーツアーでした。東日本大震災での被害等を実際に現地に足を運んで学習しました。それまでメディアでしかわからなかった気仙沼の風土や現状、震災からの歩みに触れることができました。子どもたちと接することが中心活動である私たちは、復興への歩みに触れる機会が少ないので、2年生も改めて震災の影響を確認する活動となりました。

夏、冬両活動で「面瀬川ふれあい農園」という多世代交流をコンセプトとして地域の方々によって作られた場所での活動を行いました。普段より広い遊び場で多くの遊びを用意できます。子どもたち自身でやりたいことを選択し主体性を身に付けることをねらいとし、学生は見守る側に徹しました。自然のなかでみずからの遊びを楽しむ子どもたちはとても輝いていました。

このような活動の企画や実施を通し、メンバーや団体内部に変化が生まれました。新規メンバーは話を振らずとも意見を言うようになったり、2年生は企画を引っ張ったり子どもに対する独自の向き合い方も形成されていきました。私は後期からミーティングの司会を行ったのですが、こうした変化から生まれる意見の相違でミーティングが充実したと感じる一方で、まとめ上げる難しさを感じました。試行錯誤しながらも意見の合致点を見つけながら取り組んだ半期は、私にとって人の話をじっくり聞く・要約するという苦手分野への挑戦でした。言葉がつかないのが上手に表現できませんが、すごくいい経験をさせてもらいました。下手ながらもついてきてくれ協力してくれたメンバーがいたからこそ得られた経験だと感じています。

さて、震災からまもなく6年の月日がたつ現在、対象とする小学生のなかには震災経験のない子や記憶がない子に移ってきています。そういった子どもたちに対して私たちの活動は「居場所づくり」としてどうアプローチしていくかが課題となってきています。また、活動に参加してくれる子どもたちもありがたいことに増加していて、これまでの活動場所では手ぎまになってきており場所の課題も新たに生じています。こうした課題を抱え次年度に向けた活動が始まっていますが、常に私たちは子どもにとって「居場所」になれるよう、子どもたちを軸に進んでいこうと思います。

1. 被災地支援ボランティア

「この一年間で学んだこと」

梅森 隼（中央大学総合政策科学科1年）

僕は面瀬学習支援というこどもたちに勉強を教えたり一緒に遊んだりするボランティアをしています。この団体を新入生向けのガイダンスで知り、子ども好きだったこともあったので団体に入ることを決めました。僕がこの団体で1年間過ごして気づいたことはボランティアを継続させることの大切さです。

面瀬学習支援は2012年の3月から活動が始まり、宮城県気仙沼市の面瀬小学校学区の小学生・中学生を対象に自治会館をお借りして活動してきました。始まった当初少なかった子供の数も年々増えており、現在では35人以上に参加してもらっています。ここでも大切さを感じることが出来るのですが、一番感じたのは地域の方との交流の時でした。昨年6月に現地に行った際に、自治会館を貸してくださっている地域の方にちょっとした食事会に誘っていただきました。最初はそのことに何の違和感も覚えず、地域の方とお話をして楽しい時間を過ごしていました。しかし、そのあとに先輩からその時が初めて地域の方からお声をかけていただき食事会が開かれたということを知り、驚きました。そこでやっとどれだけこの食事会がすごいことなのかを痛感しました。また、僕は今までの先輩方が築いてくださった信頼関係をもとに今の自分たちの活動が成り立っていることだということにも気づかされました。それだけ先輩方が真摯にこの活動に取り組まれ、そして活動に対する学生の思いが地域の方に伝わったのだと思います。先輩方が続けてきた5年という歳月を考えるとよりその大切さが身に沁みてきます。この信頼関係を簡単に絶やしてはならないし、自分たちが先輩の作り上げてきたものをしっかり理解してよりよい活動ができるよう努力をしていこうと改めて思いました。

この春で僕がこの団体に入ってから1年になります。入る前はまさかこんなにも充実した活動を行えるとは想像もしていませんでした。まだまだ先輩方には知識や経験で劣る部分はありますが、昨年以上にこの団体についてみんなで考えていき次の代にしっかり引き継げるよう多くのことを学んで頑張っていきたいと思います。

団体の紹介：チーム女川

理念

○復興の歩みの一歩先を見つめ、女川の人たちの声に寄り添いともに歩む

東日本大震災から6年の歳月が経過し、私たちが活動する宮城県女川町は復興へ向かう途中にあります。時の経過とともに町の方々のニーズも変化していますが、常に女川の方々と対話の中から今自分たちには何ができるのか考えることを心掛けています。そのことから女川町の魅力を学内外の様々な人に伝えることを主な活動目的としています。そのために女川町の方々、一人一人の思いや考えを聴き、その言葉を大切にしながら町についての理解を深め、魅力溢れる女川町を「発信」していくことにつなげています。また、震災によって地域とかわる機会が減り、つながりが薄くなってしまった方の声を聞き、女川町の住民同士の新たな結びつきを作ることも長期的な目標としています。

○私たちが学んでいること、生活の場を基盤に個性を活かした活動を行う

女川における現地での活動に加えて、メンバー各々の大学生活を通して得たことを積極的に活動の中で活かせる機会として、東京での活動も頻繁に行っています。また活動で得たことを再び学びに還元するためにも、お互いの意見や情報を交換することも大切にしています。

活動場所

宮城県牡鹿郡女川町

代表者

岩立文香（文学部2年）

所属メンバー

黒川涼香（法学部4年）、稲吉華那（理工学部4年）、越智つぐみ（文学部4年）、北村悠馬（文学部3年）、楠貴裕（法学部3年）、岩立文香（文学部2年）、岩田亮（法学部2年）、亀田凌（法学部2年）、宮澤智靖（法学部2年）、日下部真莉（法学部1年）、元田奈緒（法学部1年）

活動先・協力先

女川町のみなさま、女川町観光協会、女川向学館、東北応援団白金支部

春の活動（新入生対象被災地スタディーツアー）

6月3日～6月6日 5人

活動内容：新入生を対象としたスタディーツアーの実施

夏の活動

9月11日～9月14日 7人

春の活動

2017年3月11日～3月14日 3人

都内での活動

8月5日～8月7日 7人

場所：四の橋祭り

内容：調理、販売の手伝い

8月27日～8月28日 5人

場所：麻布十番祭

1. 被災地支援ボランティア

内容：調理、販売の手伝い

10月8日～10月9日 2人

場所：みなと区民まつり

内容：調理、販売の手伝い

10月22日～10月23日 6人

場所：中央大学 ホームカミングデー

内容：物産展、写真展

11月5日～11月6日 11人

場所：中央大学多摩キャンパス 白門祭

内容：女川汁（さんまのすり身汁）の販売

2017年2月11日～12日 3人

場所：イオンモール多摩平の森

内容：物産展、活動パネル展

「一年間の活動を通して学んだこと」

日下部真莉（法学部政治学科1年）

私は、1年間の活動を通して女川町の現状を具体的に知ることができ、また自分自身も成長することができました。

実際に現地に行き現地の方のお話を伺うことによって、震災当時の状況を知り震災の恐ろしさを改めて感じました。また女川町への想い、私たち学生ボランティアに望んでいることを具体的に知ることによって私たちの活動の向上に活かすことができました。震災当時は津波ですべて流され、がれきだけの状態だったのですがそこから現在の街の状態にするまでの、復興の歩みのお話を伺う中で私は女川町の方の街を想う気持ちを強く感じ、私も女川町の復興の助けになりたいと思いました。実際に女川町の方とお話をさせて頂くことによって、女川町は行政と民間が一緒に、街全体が同じ方向を向いて復興を行っていることを学びました。現地での活動を行うことによって、実際に現地に行かないとわからないことや、得ることができないものがあることを実感しました。

また、現地で得たことを活かし女川町を多くの方に発信していくために行っている東京での活動では、都内のイベントに参加させて頂き物産展を行いました。その活動の中で、物産展に来て下さった方に積極的に声をかけ、商品の説明や女川町の様子や魅力を伝え、女川町を発信していくにはさらに女川町について理解を深めることが大切なのだということを感じました。また、私たちが発信するだけではなく東北出身の方や女川町に何度も行ったことのある方が物産展に来て下さり、震災当時の状況や女川町のことを詳しくお話して下さり様々なことを学ぶことができました。

他に、女川町のために私たちは何ができるか、どのように女川町を発信していきたいかを団体のメンバーと意見を交換し合うことによって自分だけでは思いつかなかった考えなど様々な意見を聞くことができ、活動に活かすことができました。

現地での活動や物産展で学んだことを活動に活かし、震災のことを風化させず、より多くの方に女川町を知ってもらい、女川町の方の支えになれるよう今後も自分たちがすべきことを考え女川町の方々と一緒に復興にむけて活動していきたいと思えます。

「1年間の活動を振り返って学んだこと」

元田奈緒（法学部法律学科1年）

この一年間の活動を通し、大変多くのことを得たと思います。

チーム女川の活動内容は被災された方から当時のお話を聞くこと、東京での物産展、学祭でのつみれ汁販売が主になっています。そのどれをとっても私には初めての経験でした。

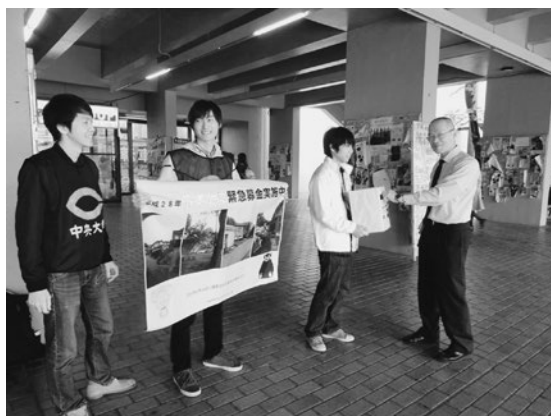
まず、実際に現地に行って感じたことは、住民の方々が主導となって街づくりを進めている女川に活気があるということでした。まだ、かさ上げ途中の段階で、以前の女川と比べるとまだまだ復興への道のりは長いと感じましたが、高橋さんにお話を聞いたとき、女川には地元を愛し、地元のために身を粉にして街づくりをする方の存在を確かに感じる事ができ、さらに、つらい過去を背負って尚、前を見ている方たちの強さも感じる事ができました。今、こうして私たちに当時のことを話してくださる方々は相当な覚悟をもって話してくださるのだということに再認識できました。故に半端な気持ちでは聞けないと思っし、お話で何か一つでも学ぶことがあると思います。また、お話の中で、女川町の街づくりの在り方が他とは違ったものであることも度々感じました。公民連携がしっかりしており、行政の手だけに任せない考え方こそが正に今の女川そのものだと思います。この仕組みこそが女川復興への最大の強みなのではないかと気づきました。

また、物産展等女川をPRする機会では、自分たちが女川と東京の架け橋であることを実感します。自分たちの活動はもちろん、女川の当時の様子や今の様子など自分が感じた女川を伝えることが重要だと感じました。この1年間で自分はどれだけ女川について知ることができるようになったかという、まだまだだと思います。これからの活動では、女川の方々の声をしっかりと聞きたいと思っし。東日本大震災の教訓が熊本地震に反映されていないこともあったと聞き、女川の方々の教訓から次の災害への備えにつながると感じています。今後の活動では、その点についても東京で発信しなければならないことだと気づきました。

1年間活動をしてみて、多くの方々との接点を持つ事ができました。女川町で私たちに話をしてくださった方々、同じように東北支援ボランティアをする仲間、物産展で出会った女川にゆかりのある方々等、みなさんとの関わり合いはとても大切であると学びました。女川町の方のお話の中でも人との絆を大事にしてほしいとおっしゃっていましたし、物産展やその他活動において自分たちが周りにどれだけ支えられているか実感しました。これからも人と人とのつながりを大切に、活動したいと思っし。

2. 災害支援

募金活動 多摩キャンパス



募金活動 後樂園キャンパス



1. 被災地支援ボランティア

(1) 熊本地震

平成28年熊本地震（大分地震）の発生を受けて、中央大学ボランティアセンターのよびかけにより「チームくまもと」を結成し、現地ボランティア活動を行うことになった。活動は、現地のニーズに柔軟に寄り添い、大学生の存在を活かし、安全に配慮しながら行った。

第1クール

日程：5月21日（土）・22日（日）

場所：熊本県阿蘇郡西原村

参加学生3名、松本コーディネーター

活動内容：「被災地NGO協働センター」とともに「足湯」ボランティアを行う

第2クール

日程：6月18日（土）～6月19日（日）

場所：熊本県南阿蘇郡西原村、菊池市

参加学生3名、松本コーディネーター

活動内容：「被災地NGO協働センター」とともに「足湯」ボランティアを行う

第3クール

日程：7月10日（日）～7月12日（火）

場所：熊本県南阿蘇郡西原村、菊池市、益城町、御船町

参加学生3名、松本コーディネーター

活動内容：「被災地NGO協働センター」とともに「足湯」ボランティアを行う

第4クール

期間：8月22日（月）～8月26日（金）

場所：熊本県南阿蘇郡西原村、菊池市、益城町

活動内容：農業支援、「足湯」ボランティア

学生5名、松本コーディネーター

「行動と可能性」

隈部雄太郎（法学部法律学科3年）

私が、2016年度のボランティア活動を通じて学んだことは、自ら行動を起こすことで自身の可能性、視野が広がるということである。

ボランティアに参加したきっかけは、地震後、テレビのニュースに映る被災者の方々の不安そうな顔を見たときに、被災者の方々と触れあえるような距離で力になれることをしたいと思ったからだ。実際に現地に行き、被災者の方々に、お湯を張った小さな桶に足を入れてもらい、足湯をしていただくと同時に手のマッサージをしながら、会話をするというボランティアと被災して手を付けられない状態であった農作地の草取りなどの農業ボランティアに取り組んだ。

私はこのような活動を通じて、新たに成長することができた。農業ボランティアでは、県外至るところから来られた初対面の方々と活動を行うことになったのだが、このご縁を大切に、距離を縮め、楽しく、真剣に協力して行いたいと思い、自ら積極的に話しかけるよう心掛けた。普段から積極的かと言われるれば、決してそうではないので、うまくコミュニケーションをとれるのか不安だったのだが、初めは自己紹介から入り、その方がどういう人なのかを知るために、この活動に参加したきっかけ等の質問をしながら、一人一人の方と会話をした。皆さんよくしていただき、活動中の水分補給を気にしてくださったり、昼食中の世間話であったり、一日の活動をいい雰囲気のまま、目標としていた仕事量を時間内に終えることができた。活動を終え、

被災者の方々に礼を聞いた時の私は充実感でいっぱいになると同時に自らの積極性という一面も意識することができ、自信にもつながった。

また、足湯の活動では、会話を通じて、現地では何が必要とされているのか、何が不足しているのか、より具体的な需要と地震を経験した被災者の方々の本音や胸の内、生の声を聞くことができた。これらのことは、今後活動していくことで重要であり、主観的に捉えていた物事をより客観的に捉えさせてくれ、自身の視野を広げてくれることにもなった。

このように、私は、実際に行動することで意識していなかった自身の一面に気づくことができ、自分の持つ可能性をさらに広げていくことができるし、行動を通じて、物事をより深い観点で考えていくことができると思う。このような経験は、自分が成長していくうえで欠かせないものとなる。

「物産展による復興支援 ―被災者の声を繋げ、届ける―」

惠良友貴（文学部人文社会学科心理学専攻2年）

被災地の商品を販売する物産展活動は、被災地の現状を発信する手段として有効だ。だが、この活動は被災地へ赴かずに実行できてしまい、下手に取り組めば内容の薄いボランティア活動になりかねない——中央大学の学生として、物産展を通じ、熊本地震の今をどう伝えるか葛藤した。上手な説明はできない。しかし、できる範囲が限られている現状では、できる範囲のことは尽力するべきだ。地震発生後に被災地へ赴こうとした私を、大分の実家に住む両親は「まだ余震が続いている。君が被災したら私たちの気が気でない」と止めたので、せめてもの思いで私は東京でできる被災地支援に取り組むことに決めた。私は物産展活動を行うに際して、まず熊本現地で被災者を対象に足湯活動に取り組み、被災者が負った悩みや思いを汲み取った『チームくまもと』のメンバーから、被災地の“今”が抱えている問題やニーズを尋ねた。被災者を始め、商品を提供して下さった販売元・生産元の声や感情を、被災地から離れた東京で伝えなければならない——そうしなければ、被災者の抱える問題やニーズは闇へ葬り去られ、誰にも届かなくなってしまう気がしたからだ。東京に住む学生として、熊本地震に対してできる復興支援活動は、熊本地震の当事者の声を学生としてのジャーナリスティックな視点で広報していくことだと考える。それは広義で学生なりに社会貢献していくことで、狭義で学生の本分として被災地・被災者の復興の過程を咀嚼し、将来起こり得る災害に対し、一人の人間としてどのような態度で寄り添っていくかを熟考する涵養の場を作ることである。ジャーナリスティックな視点の例として、物産展に取り組む上で、仕入れた商品は生産者がどのような経緯で、どのような思い・願いを込めて作っているのかをインタビューすることや、実際に受け手としてその商品を吟味し、商品に込められた生産者の真の思いを見出すことが挙げられる。提供していただいた商品そのものを物産展に来場して下さった方々にただ繋げるだけでは、被災地・被災者復興に寄与できたと言うには乏しいだろう。被災した現場の、生の声・感情を拾い、つなげていくことが物産展ボランティアには求められるのだと私は感じている。熊本地震の復興はまだ道半ばである。微力ながらこれからも復興支援に携わっていきたい。最後に、被災地応援物産展の活動に繋げてくれた多くの方々へ多大なる感謝を捧げる。

(2) 台風10号水害ボランティア

「ボランティアで広がる支援の輪」

大上拓紘（経済学部公共・環境経済学科4年）

2016年8月30日に東北地方を直撃した台風10号は私の故郷である宮古市をはじめ、東北各地に甚大な被害を及ぼしました。宮古市の被害状況を知ったのはFacebookに投稿されていた画像を見た時です。宮古市と盛岡市を結ぶ重要な道路である国道106号線沿いの川が氾濫したことによって道路が複数箇所で決壊し、山からの土石流で道路が塞がっていました。不運にも、宮古市と盛岡市を結ぶ鉄道が2015年12月に発生した脱線事故の影響で全線開通していない為、宮古市と盛岡市の交通手段は途絶えていました。

東日本大震災後、宮古市でボランティア活動をしている私たちに何かできることはないかと思い、9月11日から30日までの間に個人と団体で2回、水害ボランティアを行ってきました。私が1回目に現地入りした際は国道106号線が復旧していないため盛岡から途中までバスで行き、そこから汽車に乗り換え宮古市に入りました。翌日、ボランティア現場に到着すると言葉を失いました。そこには東日本大震災の時と同じような光景が広がっていたのです。私が活動した現場は、東日本大震災の津波で被災した地区が中心で、今回被害を受けた建物は新築やリフォームした家ばかりでした。活動内容は家の床下や側溝の泥出し、家や倉庫の家財道具を片付けることです。

活動を通して印象に残っていることが2つあります。1つ目は浸水した思い出の品を整理していた時のことです。部屋を綺麗にすることが最優先ですが、浸水した物の中には持ち主の思い出が詰まっていた。特に写真は一枚一枚、丁寧に洗い、乾燥させて出来るだけ綺麗な状態にできるようにしました。2つ目は全国各地からボランティアが集まっていることです。私が一緒に活動したメンバーに遠くは兵庫県や大阪府から、関東・東北各地から参加していました。中には「東日本大震災の復興ボランティアをして宮古市が今回被災したから、もう一度来た。」という方もいらっしゃいました。

今回の水害ボランティアを通して参加者の「早く日常生活に戻って欲しい」、「復興の手助けがしたい」など様々な想いを聞いて共感し、支援に対する感謝の気持ちが強くなりました。私は大学を卒業後、このような機会があれば支援していただいた分、恩返しの気持ちを込めて積極的にボランティアへ参加していきたいです。

「水害ボランティアを経験して」

吉田沙織（法学部法律学科3年）

「はまぎくのつぼみ」の活動で何う時のように、「いつもの見慣れた景色」があるはずだと、心のどこかで期待して宮古へ向かった道中、車窓から流れていく土埃が舞った国道45号線や暴れ狂った閉伊川に削り取られた宮古街道に、現実とは思えなかった。

台風10号による水害が発生し、これまでたくさんお世話になった岩手に、宮古に少しでも力になれたらという思いで、水害ボランティアへの参加を決めた。主な作業は、流れ込んだ泥を土嚢に詰めて運ぶのを繰り返すもので、チームを組んで声を掛け合いながら進めていく。決して暗く重い雰囲気では悲しみながら進めるのではなく、被害に遭われた依頼者の思いを最大限に尊重しながらも、活動中は前向きな言葉で励まし合った。そうすることで、私たちボランティアの作業効率上がるだけでなく、依頼者の顔も次第にほころんでいくのが分かった。

また、こまめに休憩が入り、ボランティア同士でお話をする事ができた。「仕事よりもボランティアが生きがい」と話す東京の会社員や、「私がやらなきゃと思って先生も友達も連れてきた」と言う大学生、「とりあえず何かしたくて来た」とサンダルで現れたヒッチハイカーと、現地への交通網が寸断される中、全国各地から集まったボランティアは年齢も職業もさまざまであった。宮古への思いやボランティアに対する考え方など、これまでの自分にはなかったも

のをたくさん吸収することができたように思う。

一日の作業で、泥の山と化した庭に元々の畑や玄関が戻ってきた。路肩をはみ出して積みあがった土嚢、泥がなくなって本来の姿を取り戻した庭、泥だらけになりながらも笑顔を見せる依頼者やボランティア、そして「来てくれてありがとう」の言葉。これだけ短時間で結果が目に見えるボランティア活動を経験するのは初めてで、とてつもない達成感に包まれた。この夏は、行政の災害発生時の動きについて見聞きする機会があり、ボランティアに求められるものややり方を再考するきっかけともなった。

「いつもの見慣れた景色」は、宮古市民、ボランティア、そして全国各地から応援している人々の心の中に、「これからの宮古の姿」を思いうかべながら、きっと収められているのだろう。水害にも震災にも負けない、そんな力強い歩みを進めていく宮古をこれからも応援していくとともに、今回の水害ボランティアで吸収してきたことを胸に刻み、他の活動にも生かしていきたいと思う。



2. 多摩キャンパス

1. 学内ボランティア活動

「クリーン大作戦・春の陣」

実施日：5月21日（土）

場所：中央大学多摩キャンパス周辺

参加者：18名（中大生12人、中大職員2名、日野ボランティアセンター職員他）

内容：キャンパス周辺のゴミ拾い活動

〈参加者の声〉

晴天のもと、たくさんのゴミを拾った。学生が工夫し作ってくれた空き缶を採る道具を使い、排水溝に入れられた空き缶を取ることに夢中になったり、ゴミ溜め化している場所から大物のゴミを発見したり、普段とは違う目線で歩く道路はまた新鮮であった。

「空き缶があんなに排水溝に入っていると知らなかった」

「ゴミを拾って気分もスッキリした」

「空き缶を見つけて取るのが面白かった」など、参加した学生からは様々な感想が出た。

〈活動の様子〉



「クリーン大作戦・秋の陣」

日 時：11月29日（日）9時～12時30分
場 所：多摩キャンパス周辺
参 加 者：16名（中大生10名、中大職員2名他）
内 容：東中野自治会・谷津入支部の皆さんと一緒に、キャンパス周辺道路のゴミ拾い活動と草刈り

〈参加者の声〉

学生からは、「タバコのポイ捨ては相変わらず多かった」「初めての参加で少し不安もあったが、みなさんが優しく楽しかった」「いつもより早起きして、道をキレイにできたので達成感があり、清々しい気持ちになった」などの感想が聞かれた。

地域の皆さんとの合同開催のため、活動中に「このあたりは昔、養蚕が盛んだったんだよ」「中大の学食は何が美味しいの？」など、いろいろな話をすることができ、地域との交流が深まった。

〈活動の様子〉



「クリーン作戦・ミニッツ ～30分間のゴミ拾い活動～」

「クリーン作戦」に参加した学生から、「もっと定期的にゴミ拾い活動をしたい」という声があがり、2014年から継続的に昼休みの30分間を活用して「クリーン作戦・ミニッツ」を行っています。

	実施日	参加学生数
第1回	5月17日	3名
第2回	6月20日	1名
第3回	10月13日	8名
第4回	11月15日	3名
第5回	12月12日	1名
第6回	1月12日	6名

「クリーン作戦に参加して」

谷村一成（法学部3年）

大学1年の春以来、ゴミ拾いに定期的に参加し続けているうちに、気付いたら参加回数が他の参加者と比べて最多になるようになった。僕はあくまで一参加者なのであるが、あまりにも慣れており、あまりにもみんなを知っているため、初めて参加した人にボランティアセンターの職員と間違えられることも少なくない。（見た目が30代男性にしか見えないところもこの勘違いに貢献しているとは思うが。）

そんな僕だが、もともとボランティアに強い気持ちがあったわけではない。むしろできればゴミ拾いなんてしたくないぐらいに思っている。だが、偶然美人な先輩に誘われたことをきっかけにゴミを拾うようになった。日頃、ボランティアも含めた社会貢献にきっかけがあれば参加したいという人は6割にのぼるらしい。（平成23年度内閣府社会意識に関する世論調査より）つまり、僕みたいな人がたくさんいるということだ。でも、震災支援で大活躍するボランティアの人たちによって、かえってボランティアがハードルの高いものとなってしまっている。そんな中、軍手とゴミ袋さえあればだれでもどこでもできるゴミ拾いはボランティアの初めの一歩だ。何か社会の役に立ちたい、でも何をしたらいいかわからない。そんな人にはぴったりのボランティアだと思う。

しかもゴミ拾いは地域のことを考えるきっかけにもなる。普段足早に通り過ぎる自分の暮らす街。でも、ゴミを拾っているとゆっくり立ち止まったりしゃがんだり。街がよく見えてくる。こんなところにこんな場所が？ここは不便かも。そして、ゴミ拾いにはいろいろな人が参加する。普段会わない違う学年や学部の人、近所の大学の人、教職員、地域の人。新しい出会いや交流は新しいアイデアや行動につながる。たかがゴミ拾い。でも、ゴミ拾いは社会への初めの一歩。新しい発見を求めて、僕はまたゴミを拾う。

2. 防災ボランティア活動

チーム防災

概要

2015年に発足した「チーム防災」は2年目を迎え、昨年に引き続き日野社会福祉協議会などの地域の応援を受け、自治会や学校での防災訓練のサポートとして積極的に参加した。

また学内においては初の「学生×教職員合同防災訓練」を実施し好評を博した。これらの活動の結果、学内では中央大学学生会会長賞を受賞し、学外からは日野市社会福祉協議会「第32回福祉のつどい」において2年連続で表彰された。

〈活動風景〉



2. 多摩キャンパス



「これからも～自分にできること～を」

中村亮士（商学部経営学科4年）

チーム防災は2015年夏に結成し、私はその当初から2016年度末に至るまで、継続的に活動してきました。

ボランティア活動を通じての学びの一つは、「続けることの大切さ」です。この一年間は、活動の楽しさとともに、継続することの難しさを感じることがありました。イベントを重ねるごとに運営や説明の仕方等で課題や反省点が見つかります。完成型が見えず、悩んだこともあります。

でも、それを一つ一つ乗り越えていくこと自体に面白さを感じたり、イベントに出かけると様々な年齢や立場の方と出会うことができたり、今まで気付いていなかった視点に気付くことができました。例えば、車いすに乗った方とお会いしたときに、「水害時に水深50センチもあつたら車いすの車輪は水没してしまう。動かすのは大変。」というお話を伺いました。不自由なく歩ける人であっても水深50センチで歩くのは難しいと言われていますが、車いすに乗るともっと難しくなる、ということはあまり認識していませんでした。このように、継続的にイベントに足を運んできたからこそ気付けたことはいくつもあり、続けることの大切さを実感することができました。

私には、チーム防災の活動を通して初めて知ったことがたくさんあります。例えば、中学校の体育館で一泊する宿泊防災訓練で、段ボール上で寝ることの厳しさを知りました。また、ジャッキの使い方、紙食器の作り方、アルファ米の炊き方など、頭と体を使って経験を多く積むことができました。私は今年度で中央大学を卒業しますが、今後どこでどのような災害が起きたとしても、決して他人事とは思わず、「自分には何ができるのか」を考えて、何かしらの形で力になれるように、この一年間の経験は活かします。

昨年度は4人で活動していたチーム防災は、今年度には最大時で12名が在籍する団体となり

ました。被災地支援活動を行った学生や、何らかの形で防災に関心を持った学生が新たに参加し、本当に嬉しく思っています。

今年度お世話になった地域の皆様、本当にありがとうございました。来年度以降もチーム防災は活動を続けていきます。これからもよろしく願いいたします。

「活動を通じて今の私にできる事」

廣田大智（経済学部経済学科2年）

私はこの夏、様々な人々と出会いました。生きるのを諦めかけた人、目の前で大切な人を亡くした人、車で津波から逃げた人。このような人々と熊本県の南阿蘇村で出会いました。私はGakuvoというボランティア活動を行っている団体を通じて被災地である熊本県の南阿蘇村へと向いました。熊本駅へ到着した時、私が想像していた被災地の現状と大きく異なっており変な言い方になってしまうが町や建物がきれいで、ほとんど被害を受けていませんでした。しかし約2時間移動し南阿蘇村へ到着した時、一度自分の目を疑わざるを得ませんでした。なぜなら目の前には山が崩れ、道路が割れ、橋が流されていたからです。当たり前の話だが、同じ熊本県でも場所によってこれだけものの差があるのだと肌で感じました。さらに現地の方に被災地の状況を見回りながら説明していただきました。説明の中で「どんなに優しい人でも地震の被害で命を落とすし、どんなに悪い人でも地震の被害で命を落とす。優しい人や悪い人に関係なく、いつどこで誰の所に起こるか分からないのが地震であり、大地震の前では人は無力である。」という話が今でも心の中に残っています。

そして私は地震が起きた後に何か対策をとるのではなく、地震が起きる前に何か対策を練るべきと考え、「防災力や防災についての知識」が必要であると考えた結果、そのような事に取り組み、活動をしているチーム防災に参加させていただきました。加入当時は、防災についての知識が皆無で不安でしたが、逆にそれを強みにして、分からないことはしっかり聞いて、一つ一つ吸収しようと心掛けました。その過程で様々な人々と出会い、多くの事について学びました。そこで感じたのは防災には決まった答えは無く、一人一人の考えが重要であるということです。なのでこれからも相手の意見や考えをしっかり聞き、その上、自分の意見や考えも伝え防災と向き合っていきたいと思いました。

チーム防災は誕生してまだ日は浅いですが、次の世代に伝えていくには、まずは自分がしっかりと防災についての知識を理解することが必要だと思います。それにより次の世代に知識を伝える事ができ、結果としてその防災の知識により、被害を少しでも減らせれば私は幸いです。なので今私にできること、つまり「防災力や防災についての知識を理解すること」を今よりも一層真剣に取り組んでいこうと改めて思いました。

3. 地域ボランティア活動

(1) 国産大豆を子どもたちの給食へ！大豆プロジェクト

実施日：6月18日、7月9日、8月20日、9月10日、10月15日、11月26日
参加者：学生22名（延べ数）教職員1名
場所：七ツ塚ファーマーズマーケット（日野市）
内容：日野市役所産業振興課とNPO法人めぐみと協働プログラムに参加

〈参加者の声〉

遺伝子組み換えが多いことで知られる大豆ですが、このプロジェクトでは遺伝子組み換えでない安心・安全な日野産大豆を栽培し、学校給食を通じて子供達に提供することを目的として活動しています。今年度は市内農業者、企業、市内小中学校調理員、栄養士、市職員、そして中央大学の学生を含むボランティアさんが協力して活動を行いました。中央大学の学生の方々には年間を通して参加していただき、大変感謝しております。特に、夏場の除草作業や、雪が残る中での収穫作業など、人手が多く必要となる際に、参加してくれたことは我々の大きな励みとなりました。また、若い学生さんが参加してくれたことで、畑での作業中の会話が活発になり、他の参加者も楽しそうに作業しているように感じられました。おかげさまで、今年度は昨年の収穫量を20kg以上上回る75kgの大豆を収穫することができました。これからこの大豆が市内小中学校の学校給食に使用され、こども達へと提供されます。昨年度から始まった中央大学ボランティアセンターとの交流ですが、今後も学生さんにとって少しでも貴重な経験となるような場を提案できればと思っています。今後ともよろしくお願ひいたします。

（日野市役所 澤井さん）

(2) ユギ里山ファーム

実施日：4月23日、5月14日、6月11日、7月9日、23日、8月29日、9月24日、
10月8日、22日、11月12日、26日、12月10日
場所：八王子市・堀之内里山保全地域
参加者：学生のべ48名 教職員1名
内容：里山保全地域での農作業活動として、地元NPOの活動に参加

〈参加者の声〉

僕はIVUSAというボランティアサークルに所属していて、毎週土曜日の里山の活動に参加しています。活動場所は東京都とは思えないほど自然豊かなで、空気が澄んでいて、とても活動していて気持ちいいです。里山の活動内容としては人の手入れによって守られる昔ながらの美しい風景と、多様な生き物が共生している環境を守ることです。活動は里山を守る事だけではなく、地域の方で構成されているユギ里山保全チームの方々とコミュニケーションとすることにより、地域の方と仲良くなることも目的としています。京王堀之内の方では、主に除草作業や農作業を中心とした活動をしており、活動後にはたまに、ミニトマトやジャガイモといった野菜がもらえることがあり、一人暮らしの僕にとっては、とても助かっています。そのほかにも、稲踏みや耕耘機を使って、耕したりする作業など日ごろすることのないとても貴重な体験をさせてもらっています。南大沢では、ビオトープ周辺の除草作業や水質調査をしています。多摩ニュータウンが開発されている最中、こういった保全活動は途方もないものかもしれませんが、しっかり、この緑'美しい環境を後世に残していきたいです。

（経済学部1年 丸瀬秀征）

(3) せせらぎ農園

実施日：8月7日、11月20日、2月16日
 場所：八王子市・堀之内里山保全地域
 参加者：学生8名 教職員1名
 内容：せせらぎ農園での農作業活動として、地元NPOの活動に参加

〈参加者の声〉

せせらぎ農園さんには自分が所属している団体「C-plant」の活動に協力していただき、いつもお世話になっております。これまでの訪問を通して、そこでは地域の方々が元気に農作業をしていたり手作り料理を食べながら会話を弾ませていたり、とても魅力的なコミュニティを生み出していると感じました。また、自然と農園に地域の方々が集まり、ご高齢の方から子どもまで楽しく多世代交流をしながら活動しているという印象を受けました。しかし地域の人が自主的に農作業をするコミュニティガーデンは欧米では多く見られますが、日本ではまだまだ知名度が低いというのが現状です。環境教育の場や高齢者の活躍の場、地域の居場所となるコミュニティガーデンは今日の日本の社会問題を解決する上で必要不可欠になってくると感じました。都市と調和するコミュニティガーデン、地方の市町村のプラットフォームとなるコミュニティガーデンなど、様々な形でコミュニティガーデンが日本全体に広がっていけるよう、これからせせらぎ農園さんのサポートや普及活動をしていけたらと思います。食の大切さや地域の方々とのつながりの大切さを改めて教えてくれる、そんな素敵なせせらぎ農園さんまで足を運んでみてください。

(法学部3年 八鍬あゆみ)

(4) 落川交流センター

実施日：4月24日、9月25日、11月6日
 場所：日野市落川
 参加者：学生10名、教職員1名
 内容：地域拠点としての落川交流センターでの地域づくりに参加

〈参加者の声〉

「地域は広い」

私が落川交流センターで活動して感じていることは、この一言に集約されます。

興味を持ったきっかけは、大学の講義やゼミ、サークルでの勉強を通して、まちづくり・地域活性化に関心を抱いていたからです。現場と密接に結びつくこういった分野を、机上の空論で終わらせて卒業したくはないと思い、足を運びました。

ここでは、災害に備え、まずは顔の見える関係づくりから始めようと、様々なイベントを定期的に行っています。訓練を兼ねた炊き出しマルシェや、市民協働マルシェ等です。

2016年度は、バスツアーを始めとして、交流センターを学生が訪れることが多い年でした。事務局長を務められている原さんは、学生ボランティアとの連携に関心を寄せられるようになりました。そして、両者が率直に意見を交わし合うことでお互いにとって良い環境を作るべく、「ボランティア研究会」の開催が決定しました。学生が地域に積極的かつ主体的に働き掛ける素地がまた一つ生まれました。

「地域は広い」

中大の近くでの活動と言えば、身近で、気軽で、大したことがないような印象を抱くかもしれません。しかし、地域は価値観の宝庫です。私はその可能性に満ちた空間から多くのことを学び、そしてより良いものにする為に、これからも活動を続けていきます。

(法学部政治学科2年 森春菜)

(5) 日野新選組まつり

実施日：5月7日～8日
場所：日野市
参加者：学生19名、教職員1名
内容：日野市にゆかりのある新選組まつりのサポート

(6) みんなの遊・友ランド

実施日：6月12日
場所：日野市市民の森ふれあいホール
参加者：学生4名、教職員1名
内容：日野市役所が主催する、障害のある子ども遊ぶイベントの運営サポート

(7) みんなと一緒の運動会

実施日：10月2日
場所：中央大学・第一体育館アリーナ
参加者：学生7名、教職員1名
内容：一般ボランティアが参加。障がい者と積極的にかかわる

(8) まちづくり市民フェア

実施日：10月16日
場所：日野市市民の森ふれあいホール
参加者：学生12名、教職員2名
内容：学生が活動から学んだこと、活動団体への提案の発表を行った

(9) 夢ふうせんバザー

実施日：10月23日
場所：社会福祉法人夢ふうせん（日野市）
参加者：4名
内容：バザー運営のお手伝い

3. 後楽園キャンパス

1. りこボラ！

「興味から参加することの重要性」

白尾 陸（理工学部物理学科3年）

私はこの一年教育ボランティア・イベントに参加しておりましたが、そのきっかけは、教職課程の履修です。二年時の教職課程の授業で子どもに対する虐待やネグレクト、発達障害のある子どもの特徴等を学びました。しかし、講義として聴くだけでは今ひとつ実感が湧かず、実際にそのような子ども、家庭を訪れて直接話を伺いたいと思いました。

初めからそのような家庭的に絞るのは難しいので、学童ボランティア、障害あるなしに関わらずみんなで遊び、学ぶ場を作る団体、英語遊びインストラクターの資格の取得等多様なボランティア・イベントに参加しました。これらは“りこボラ！”での活動を通してボランティア仲介施設とつながることができ、この施設のおかげで上記の団体等に参加することが可能になったからです。実はこれらを始めたのは、私が三年になってからのことなのでいくつかの活動を並行して行っていたときもありました。そんな活動をする中で、各関係者の教育理念、障害児童との接し方、英語教育の方法、教育関係はもちろんのこと、プレゼン力アップのコツ、人に伝える力、起業経験者から起業の話をする機会までもらうことが出来ました。その経験や出会いを通して、もとより目的としていたもの以上のものが得られたことに感謝しています。

ここからが私のこの一年間を通しての教訓です。目的に近いもの、少しでも興味を引いたものであれば、迷うことなく顔を出すことです。それが目的に叶うか叶わないかを考えるのはこの次です。目的に似ている、興味があるという場には何かしら自分の知りたい知識、スキルを持った方々がいるはずで、その上で一方的な公聴会への参加にならないように、自らコミュニケーションを図って次につなげるようにしました。私はこれを続けることで、教育ボランティアからの経験という枠組みでは括り切れない知識やスキルを得ることができました。当初の目的なんてどうでもよいと思えるぐらいに。もちろん大切なことではありますが。

最後に、私のきっかけがたまたま教育のボランティアであっただけで、自分の専攻分野であれば、研究施設の見学、ビジネスであればインターンやビジネスコンテストへの参加、少し見渡せば活動を起こすためのイベントは多く転がっています。「考えるより即行動」これが私の教訓です。私はこれからも興味あるものに目を光らせようと思います。

「“りこボラ！”を通して」

生島功貴（理工学部数学科1年）

同じ中央大学生ともありながら、ボランティアに対して偏見が持たれているのが理工学部の現状です。残念ながら偽善と称されることもしばしばあります。それを変えたい。その思いが今活動に専念する自分を作り上げています。

私が大学生生活を充実なものにしたいと、学内学外に関わらず多くの人との交流を求めて模索していた時に出会ったのがこの「りこボラ！」でした。まだ理工学部に「りこボラ！」が発足して間もない時期のことです。「理系でもボランティアを日常に」というテーマに惹かれて参加しました。

さて実際に参加して1年、学んだことは数多くありました。それらを3つにまとめます。

まず挙げられるのは「人とのつながり」です。「りこボラ！」では同大学の多くの学生はもちろんのこと社会福祉協議会を通じて文京区民の方や他大学の方と交流し、協力して活動をす

3. 後楽園キャンパス

ることが出来ました。それにより、違う環境にいても同じ目的や同じ想いを共有することで達成感を共にし、より深い関係を築けたように思えます。

次に挙げられるのは、企画・運営する側の経験です。「りこボラ！」ではゴミ拾い等のボランティアイベントやボラカフェというボランティア経験を共有する場の企画運営を行っています。その中で一から案を出すことの難しさや、イベントの裏方の大変さを感じると同時に、責任の重さを痛感しました。

最後は人の「言葉」の力です。参加したボランティアの中でとりわけ印象強く心に残っているのは、認知症の方の櫛を繋ぐマラソンボランティアです。縁あって参加したもののそこでかけていただいた言葉の数々は、想像以上に自分の力となり支えとなったのです。

その上で、そもそも偽善とはなんなののでしょうか。それは他人から「善いと思われたい」からという思いで、上辺で活動することです。しかし私は「善いと思う」行為だからこそ自らボランティアに取り組みます。皆が日常的にボランティアを善いと思う行為にすれば、自ずと偽善という批判は無くなるでしょう。そのためにも今後も「りこボラ！」で活動を続けていきます。



2. 学内ボランティア活動

(1) 「ボラカフェ@後楽園」

「ボランティアや社会課題について気軽に話せる場所・時間・仲間づくり」を目的に、2015年度から多摩キャンパスで行われている『ボラカフェ』。後楽園キャンパスでは「りこボラ!」が様々なテーマで実施した。場所はいずれも3号館会議室DE。

	日程	テーマ	話し手	参加人数
第1回	5月24日(火)	入門編	・池田木綿奈(人間総合2年) ・司会:白尾陸(物理3年)	30名
第2回	6月9日(木)	東北から国際ボラまで	・中村祐貴(人間総合3年)	21名
第3回	7月5日(火)	国際交流	・尾藤里香(数学2年) ・池田木綿奈(人間総合2年) ・河本梨絵(国際センター)	12名
第4回	10月5日(水)	夏休み東北ボラ	・越坂部佑佳(応化2年)	30名
第5回	10月13日(木)	教育ボランティアについて	・白尾陸(物理3年)	21名
第6回	11月16日(水)	阿波踊り×ボランティアって?	・多田隆康(数学2年)	9名
合計				123名



3. 後楽園キャンパス

(2) クリーン大作戦@後楽園

実施日：5月28日
場所：後楽園キャンパス周辺
参加者：学生31名、教職員1名
内容：留学生と活動を通して交流を深める

(3) 白門祭@後楽園キャンパス

実施日：11月5日、6日
場所：後楽園キャンパス 5133教室
参加者：5日75名、6日186名 合計261名
内容：「防災」をテーマに「クロスロード」「ダイレクトロード」など防災ゲームの体験会と活動展示

3. 地域ボランティア

(1) 新歓ボラ活動 花壇整備

実施日：4月16日
場所：文京区役所前
参加者：学生18名、教職員1名
内容：NPO法人「緑のゴミ銀行」の花壇整備活動に参加

(2) さきちゃんち 1周年記念

実施日：9月14日
場所：文京区
参加者：3名
内容：施設の1周年のお祝いの会の参加者受付、誘導、子どものお世話

(3) 文京ボランティア市民活動まつり

実施日：11月19日
場所：文京区民センター
参加者：7名
内容：文京区学生ボランティア協議会（中央大、跡見学園女子大、東洋大、拓殖大、東洋学園大）のブースで「災害」をテーマに「ダイレクトロード～文京の町」を実施

報告編

4. 学内での活動報告事業

1. ボランティア活動写真展

実施日：10月23日（日）～27日（木）
場 所：多摩キャンパス中央図書館1階
内 容：展示期間中の各日昼休みに学生が説明会を実施
主 催：被災地支援学生団体

〈ホームカミングデー〉



約50人の学生が参加しました



OGOB、保護者、職員が来ていただきました



物産展の様子



物産展会場でもOBとの交流ができました



昼の報告会1日目



昼の報告会3日



昼の報告会2日目



昼の報告会4日目

2. キャンパスライフ体験会（父母連絡会）

実施日：10月29日（土）

場 所：多摩キャンパス 1406号室

内 容：被災地支援学生団体代表学生による活動発表

発表者：

- ・チーム熊本（熊本県西原村） 隈部雄太郎（法3）
- ・はまぎくのつぼみ（岩手県宮古市） 松井亜美（法1）
- ・はまらいんや（宮城県気仙沼市） 木村亘佑（法2）
- ・面瀬学習支援（宮城県気仙沼市） 大谷夏子（文2）
- ・チーム女川（宮城県女川町） 岩立文香（文2）



5. 学外での活動報告事業

(1) 大学ボランティア活動写真展

実施日：4月11日～18日

場所：日野市役所1階市民ホール

内容：テーマ「被災地から日野へ」（協力 日野市企画部地域協働課）

(2) 明星大ボランティアシンポジウム

実施日：10月8日

場所：明星大学

参加者：3名

内容：「チーム防災」から中村亮士（商学部4年）が活動発表

(3) 日本財団ボランティアセンター報告会

実施日：2017年2月4日～5日

場所：東京スポーツ文化館

参加者：7名

内容：スタディーツアーの報告及び気仙沼、宮古での活動報告

(4)「大学生ボランティア活動報告パネル展&防災イベント」報告

東日本大震災3月11日の1か月前、イオンモール多摩平の森（JR豊田駅北口）にて、多摩地区6大学（中央、明星、法政、首都大学東京、実践女子、東京薬科）合同で、被災地支援と地域防災のイベントを行った。近隣大学と協力して行うことで、学生同士の交流が進み、人間的視野が広がることや活動が活発化すること、また、集客やマスメディアの注目を集めることも狙った。実施にあたり、日野市ボランティアセンター、日野市地域協働課、イオンモールから多大な協力をいただき、会場および設備は無償で貸していただいている。地域と学生が直接触れ合うことで、学生が地域のニーズに気付き、考えが深まることや地域が等身大の学生を知り、地域での学生のボランティア活動が円滑に進むことにもつながった。

1. **実施期間** 2017年2月8日（水）～12日（日）5日間

2. **場所** イオンモール多摩平の森（JR豊田駅北口）

3. 内容

▼パネル展示 期間中開催

各大学の被災地支援の活動を写真や文字で紹介。学生が会場で解説

▼イベント 2月11日（土）13時～17時、2月12日（日）10時～16時

- ①大学生・中学生による活動報告
- ②避難所運営ゲーム（HUG）、クロスロードの実施
- ③防災ワークショップ・カエルキャラバンの実施
- ④東北・熊本・大分物産展の実施（中央大学）
- ⑤方言ビンゴ大会
- ⑥こころとからだの健康ひろば
- ⑦着ぐるみや大道芸による呼び込み

4. 来場者数

パネル展 約1,100人、 イベント 約400人 【合計 1,500人】

5. **参加大学生数** 150人

6. 来場者の感想

- ・小さな力は、集まれば大きな力となる。是非、大学外でも、社会に出ても、ここで学んだことを生かしてほしい
- ・今後も、このような活動を是非継続させてほしいと願っている。被災地で知ったことを大学周辺で発信するのは、大学近隣の住民にとっても、被災地にとっても大きな意義があると思う
- ・大学生が社会に出る前に、会社ではなく社会とつながる大変良い機会だと思った。就職先でも鍛えられると思うが、学生時代に学んだ社会とのかかわり方、必要なことを胸に、社会に役立つ、これからの社会を支えていく人材になってほしい
- ・震災の記憶を風化させず、被災地の現状を伝える素晴らしい催しだと思った。活動発表は、準備や時間の都合で難しいかもしれないが、各団体の発表の後に参加者からの質問の機会があると、さらに理解が深まるのではないかと思った

5. 学外での活動報告事業

7. 写真

【パネル活動展】



【防災ワークショップ・クロスロード、避難所運営ゲーム (HUG)】



【カエルキャラバン】



【物産展】



【活動発表】



【集合写真】



8. 広報活動およびメディア掲載

▼広報活動

- ・中央大学ホームページ
- ・中央大学ボランティアセンターFacebook
- ・CVCだより
- ・日野市ボランティアセンターだより
- ・イオンモールホームページ
- ・イオン内掲示
- ・イオン館内放送

▼メディア掲載

- ・読売新聞2月12日版（多摩版）
- ・東京新聞2月4日版（Campusインフォメーション）
- ・J-WAVE「JAM THE WORLD」電話出演
- ・地域新聞「ショッパー」

学 び 編

6. 入門

1. ボランティア講座

【多摩】

(1) 公務員になりたい人のためのボランティア講座

実施日：5月23日（月） 6月21日（火）

場所：多摩キャンパス 6103教室

参加者：5月 51名 6月 62名

内容：公務員が必要なボランティア精神、ボランティアの4原則、ボランティアの目的や意義、ボランティアマナー、情報の探し方

〈参加者の声〉

- なぜ公務員を目指す上でボランティアが必要かわかった。ぜひ参加したい
- 公務員の人の実体験を聞くことができ、とても良かった
- 就職のためにボランティアをするのが必要なのではなく、することで学んだ内容・体験した事項を自分の経験として活かすことができることを知ったので、ボランティアに対し意欲がわいた

〈5月講座〉



〈6月講座〉



(2) 地域発見！公務員と巡る五感で感じるバスツアー

実施日：5月29日（日） 6月26日（日）

場所：八王子市及び日野市近郊

参加者：各回 22名

内容：八王子市内と日野市内の地域拠点5ヵ所を巡り、地域づくりのリーダーさん達から話を伺う

〈5月バスツアー〉



〈6月バスツアー〉



(3) ボランティア体験×学び 振り返りワークショップ

実施日：10月8日（木）
場所：多摩キャンパス 1410教室
参加者：29名
内容：ボランティア活動の振り返り

〈参加者の声〉

- いろんな視点で自分の活動を振り返ることができた
- 新しい見方をすることができ、とてもためになった
- もっとやりたかった

〈講座の様子〉



(4) 春休み、一步踏み出したいアナタのためのボランティア講座

実施日：2017年2月2日（木）11:00～13:00

場所：多摩キャンパス 3256号室

参加者：13名

内容：活発に活動している学生3人に話をしてもらい、3グループに分かれてワールドカフェ方式で主に体験談を話してもらった

〈講座の様子〉



【後楽園】

(1) 理工学部新入生ガイダンス

日 時：4月5日（火）①13時～14時、②15時～16時

場 所：後楽園キャンパス 5233教室

内 容：

1. ボランティアセンターの紹介 コーディネーター松本より
2. ボランティアセンター学生スタッフ後楽園支部「りこボラ！」の紹介
「りこボラ！」代表 池田木綿奈（人間総合2年）
3. ボランティア経験者の体験談※第2回のみ
 - ・合田明弘（都市環境3年）2016年3月南相馬植樹祭に参加して
 - ・越阪部佑佳（応用化学2年）WISEで活動して

参加者：

	数学	物理	都市	精密	電気	応科	経工	情報	生命	人間	
1回目	2	1	5	1	2	4	1	2	1	0	16
2回目	0	2	1	1	2	3	1	1	8	0	29
合計	2	3	6	2	4	7	2	3	9	0	45

様 子：

- ・会場で確認をとったところ、第1回はボランティア経験者が3人（いずれも東北支援活動、高校で実施）、第2回は1人（地域のゴミ拾い、自分で見つけて参加）だった。
- ・また「ボランティアをしてみたい」と思って参加した人が6割、「ガイダンス資料にあったのでなんとなく参加」が4割くらいで、学生の意欲の高さを感じた。



(2) 理工学部オリエンテーション

理工学部で1年生を対象に行われる、通年授業「オリエンテーション」にて、6月13日(月)、14日(火)の2日間、各1限で「聞かなきゃ損する！ボランティア入門」授業を行った。昨年度とは異なり「選択科目」となったため、多少、ボランティアに興味がある学生が参加していることを期待し、「ボランティアの4原則」など基本的な話もした。また「りこボラ！」代表学生、メンバー学生の体験談を学生視点で話をしてもらった。また文京区社会福祉協議会の職員からも地元の具体的なボランティア活動について話をしてもらい、夏休みにボランティアをしたいと考えている学生の背中を押すことを目指した。

〈概要〉

1. ボランティアセンターよりボランティア入門……コーディネーター・松本真理子
2. 「りこボラ！」よりボランティア体験談……代表・池田木綿奈(人間総合2年)
13日 生島功貴(数学科1年) / 14日 小泉郁乃(人間総合1年)
3. 文京区社協より具体的なボラ活動の紹介……平石 進さん(文京区社会福祉協議会)
田中静恵さん(文京ボランティア支援センター)

〈出席者数〉

	学科	1日目	2日目
1日目	数学科	8	1
1日目	電気電子	1	20
1日目	応用化学	16	
1日目	経営システム	6	
1日目	情報工学	11	
1日目	人間総合	8	
2日目	精密機械		27
2日目	物理		21
2日目	都市環境		36
2日目	生命科学		8
2日目	精密機械(3年)		1
		50	114
			164



生島さん



小泉さん



文京区社協・平石さん

2. ボラカフェ

実施日：下記参照

場 所：多摩キャンパス6号館教室、グループカウンセリングルーム

内 容：昼休みにボランティアについて気軽に話せる場として計12回実施

日程	テーマ	参加人数
4月13日	ボランティアってどんなもの??	18人
4月20日	ボランティアってどんなもの??	9人
4月22日	多摩の魅力発見! 地域ボランティアってどんな感じ?	16人
4月25日	国際&海外ボランティアってどんなことする?	17人
4月27日	ボランティアってどんなもの??	15人
5月18日	ボランティアってどんなもの??	8人
5月27日	『LGBTの「当事者」と「非当事者」』	70人
6月6日	変人女子会	52人
7月7日	国際ボラ編	11人
10月17日	『僕らの一歩が日本を変える。』	68人
12月9日	インドネシアでのワークキャンプ体験談	15人
12月12日	アナタは大丈夫? ～寸劇でわかるアルハラとLGBT～	34人
1月18日	「私たちが考える『異文化交流』 ～フィリピン訪問を続けて学んだこと～」	3人

7. スキルアップ編

1. 「東北ミニシンポジウム～陸前高田から学ぶ ～学生は“地域の力”になれるのか～」

日 時：6月24日（金）13：20～16：30

場 所：多摩キャンパス6103教室

内 容：地域（特に遠方の過疎地など）のまちづくり・活性化に関わる学生たちの中から出てきた疑問「学生は地域の力になれるのか」をテーマに、ミニシンポジウムを環境FLP谷下・中澤ゼミと共催で開催した。講師には陸前高田の復興に深くかかわる3名をお招きした。

講 師：

- ・陸前高田広田半島のワカメ漁師・村上俊之さん
- ・子ども図書館「にじのライブラリー」・荒木奏子さん
- ・都市計画コンサルタント会社アルメックVPI・内山征さん

進 行：谷下雅義（理工学部都市環境学科教授）

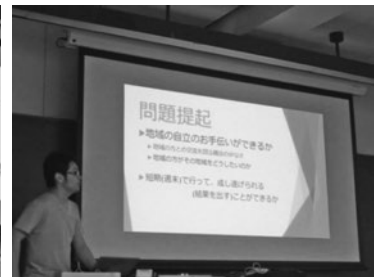
問題提起：

- ①東北気仙沼の活動から……面瀬学習支援 宮崎汐里（法学院2年）、大谷夏子（文学部2年）
- ②能登半島の活動から……環境FLP 上村慶輔（法学部3年）

参 加 者：20名



問題提起①面瀬学習支援（気仙沼）



問題提起②FLPゼミ（能登）



講師：村上俊之さん



講師：荒木奏子さん



講師：内山征さん

2. 「傾聴講座」

日 時：12月18日（日）13時～17時

場 所：多摩キャンパス 3256教室

参加者：29名

講 師：NPO法人パートナーシップリスニングアソシエーション理事長
後庵正治さん

内 容：被災地での夏の活動を終えて冬の活動に行く前に学生のスキルアップを図ることを目的とした

〈参加者の声〉

- 「傾聴」する時には、沈黙も必要なことであるということ。
相手の事を気遣って積極的に会話をしようとする質問したり、話題を振ったりすることが必要であるのかと思っていたが、相手の思いを繰り返すことによって話を理解しているのだと伝え、沈黙して相手の言葉を待つのも傾聴の一つなのだと感じた。 （文・1 女子学生）
- 傾聴といっても話を聞いて共感するだけでなく無言でいることも傾聴になるとは思っていませんでした。 （総政・1 男子学生）
- 2人が話しているところを観察したこと。客観的な立場で傾聴する過程をみる中で何が必要なのか捉え直せた。 （法・1 男子学生）
- 傾聴の時の会話の主導権はあくまでも話し手であって、聞く側が話してしまうと日常会話になってしまうということ学びました。 （文・2 女子学生）



3. 神戸スタディツアー

実施日：2017年2月26日（日）～2月28日（火）

参加者：学生15名、教職員2名

目的：阪神淡路大震災の教訓を学ぶこと、団体の運営を下の学年に引き継ぐため

成果：東北や熊本で活動してきた学生たちが、自らの復興支援活動を、神戸からの時間軸のなかで捉え直すことで、今後の活動の展望を見つめることができた。

〈行程表〉

2月26日	13:00 人と防災未来センター見学 (宿泊) ひょうご共済会館
2月27日	午前：宇都幸子さん（ <u>阪神高齢者・障がい者支援ネットワーク代表</u> ）のお話を聞く 大池東住宅のお茶会に参加 午後：宮定章さん（ <u>認定NPO法人まち・コミュニケーション代表理事</u> ）のお話を聞く (宿泊) ひょうご共済会館
2月28日	午前：村井雅清さん（ <u>被災地NGO協働センター顧問</u> ）のお話を聞く 午後：鬼本英太郎さん（ <u>ひょうごボランタリープラザ所長代理</u> ）のお話を聞く 振り返りミーティング 夜行バス組出発



4. 防災スタディツアー～石巻大川小から学ぶ～

実施日：2017年3月7日（火）～8日（水）

場 所：宮城県石巻方面 大川小学校跡 女川駅周辺

参加者：学生14名 教職員2名

講 師：

- ・大川小学校遺族・小さな命の意味を考える会代表・佐藤敏郎さん（認定NPO法人カタリバ）
- ・七十七銀行女川支店遺族・七十七銀行女川支店被災者家族会・田村孝行・弘美ご夫妻
- ・女川1000年後の命を守る会主宰・阿部一彦さん（宮城県東松原市立矢本第二中学校教頭）

目 的：石巻、大川小学校、女川で被災した建物を実際に自らの目で確かめること、震災を実体験した人からの話を聞くこと

成 果：学生は普段の活動が多摩地域なので、被災地の現状と防災活動の実態を知ることができた

行程表：

1日目	3月7日(火)	9時仙台集合→(三陸自動車道・石巻港IC降車)→石巻日和山公園立ち寄り(門脇小学校前)→(三陸自動車道・河南→河北)11時30分～12時30分「道の駅・上品の郷」で佐藤敏郎さんと合流～車中で防災に関する説明を受ける→13時15分大川小学校にて見学→14時30分～16時雄勝ローズガーデンにて「防災」をテーマにディスカッション→16時30分女川七十七銀行跡を見学解説 18時：エルファロ 夜：防災に関する講演と振り返り
2日目	3月8日(水)	9時出発→女川町界隈→14時バス降車

■女川訪問先

1. いのちの石碑
2. 女川フューチャーセンターcamass
3. 女川きぼうのかね商店街 (株)小野寺茶舗 小野寺武則さん
4. 女川向学館
5. (株)オーテック 等



8. 防災・災害

1. 災害救援ボランティア講座

実施日：8月3日（水）～5日（金）

場所：多摩キャンパスCスクエア中ホール 3日（水）午後、立川防災館

参加学生：22名

内容：8月3日（水）午前：講義 出火防止と初期消火、災害と防災対策の基本
午後：立川防災館での災害疑似体験

8月4日（木）終日：上級救命技能講習

8月5日（金）午前：講義 災害救援ボランティアの基本、災害と防災対策の基本
午後：演習 災害時のリーダーシップとチームビルディング

〈参加者の声（アンケートより抜粋）〉

- ・被災地を訪れてボランティアをするための能力や知識などを学べるとともに、日常生活などでもけがやトラブルが起こった際の対処療法も学べたのでとてもためになった。
- ・あっという間の3日間でしたが充実したものになりました。今回この講座に参加してみて自分がいかに知識がないことを痛感させられました。私が特に良かったと思う点は立川防災館での実習と救命の講習が非常に勉強になり消火器の使い方や心肺蘇生法、AEDの使い方を学べて良かったです。
- ・実技があったので知識だけでなく体で覚えることができ、災害時等、実際に助ける場のシミュレーションができたと思う。

〈講座の様子〉



2. 公務員になりたい人のための！ 防災・災害ボランティア入門講座

日 時：11月16日（水）16:40～18:10
場 所：多摩キャンパス6号館1階 6103教室
参 加 者：31名（うちチーム防災5名）
内 容：

- 講義1** 「防災ボランティアに役立つ！自助・共助・公助のキホン」
一般社団法人 防災教育普及協会 宮崎 賢哉さん
- 講義2** 「災害ボランティアに役立つ！被災された方の生活再建支援」
災害救援ボランティア推進委員会 高須 大紀さん
- 講義3** 「災害時における公務員の役割～現場の立場から」
日野市総務部 防災安全課 吉田 敦紀さん



3. BOSAI CAFÉ

実施日：7月1日（金）、10月12日（水）、11月30日（水）
 参加者：39名
 内容：防災ワークショップをお昼休みに食事をしながら気軽に体験してもらう

4. 学生×教職員合同防災研修

これからの災害では学生と教職員が同じ意識を持って防災訓練に取り組むことが必要であるとの認識のもとに、第1弾では中央大学の学生ボランティア団体「チーム防災」が中央大学版にアレンジした「クロスロード」、第2弾は「避難所運営ゲームHUG」を通して、災害時における避難所の運営を学んだ。

日時：12月16日（金）15：10～17：00
 場所：多摩キャンパス11号館2階 11230教室
 参加者：学生16名 教職員15名
 日野市社会福祉協議会3名 成蹊大学4名 青山学院大学1名
 内容：第一部・今、大学に求められている防災の役割とは講師：宮崎雅也さん(日野市ボランティア・センター)
 第二部・中央大学版クロスロード・学習の振り返り

日時：2017年1月13日（金）15：10～17：00
 場所：多摩キャンパス11号館2階 11230教室
 参加者：学生20名 教職員5名 日野市社会福祉協議会3名
 地域の方々8名（南平地区社会福祉協議会、平山小学校、緑が丘自主防災会） 青山学院大学1名



資料編

9. 表彰受賞学生団体

(1) 中央大学学員会会長賞



「はまぎくのつぼみ」



「チーム防災」

(2) 日野市社会福祉協議会「第32回福祉のつどい」

- 「チーム防災」(2年連続受賞)

中村亮士(商学部4年)、小山景子(総合政策学部4年)、西沢栞(総合政策学部4年)、
青野大志(経済学部3年)



10. ボランティアセンター 利用集計

ボランティアセンター相談者統計（人）

月	相談者	男	女	法	経	商	文	総	理	不	1	2	3	4	他	震災	教育	福祉	国際	構内	地域	環境	文化・芸術	スポーツ	他
4月	296	140	156	116	47	40	53	24	0	16	108	104	55	13	16	159	103	61	85	9	132	83	53	41	50
5月	218	105	113	79	46	38	37	15	0	3	56	108	41	7	6	146	53	37	50	4	61	35	25	26	29
6月	187	109	78	69	42	29	40	7	0	0	47	91	34	9	6	149	30	17	29	3	43	31	22	15	20
7月	256	148	108	99	57	44	38	17	0	1	36	101	79	21	19	156	42	33	34	3	54	28	16	13	24
8月	87	49	38	36	14	14	12	10	0	1	22	34	16	13	2	85	11	9	8	1	17	10	9	8	7
9月	127	64	63	38	27	22	20	20	0	0	11	56	18	41	1	36	28	24	24	15	36	10	6	8	11
10月	205	104	101	67	46	26	40	23	0	3	25	92	39	49	0	48	42	32	47	37	17	15	8	6	35
11月	211	98	113	64	31	30	51	31	2	2	33	97	37	30	14	149	35	22	18	3	26	11	10	5	7
12月	132	60	72	49	16	14	40	12	0	1	16	86	14	15	1	122	6	5	8	0	9	8	5	2	9
1月	150	71	79	40	36	13	33	26	0	2	30	73	20	26	1	135	7	6	9	2	16	6	8	4	4
2月	130	71	59	37	25	22	26	20	0	0	27	69	8	26	0	132	7	6	5	1	15	10	7	8	5
3月	93	46	47	28	17	14	20	13	1	0	17	42	10	23	1	1	11	14	12	0	16	16	8	10	10
合計	2092	1065	1027	722	404	306	410	218	3	29	428	953	371	273	67	1318	375	266	329	78	442	263	177	146	211

ボランティアセンタールーム利用記録

月	利用件数(件)	利用日数(日)	利用時間(分)	利用人数(人)
4月	25	15	2084	144
5月	28	17	2435	153
6月	27	20	2997	124
7月	13	12	1170	64
8月	10	8	1590	39
9月	16	14	1975	87
10月	35	18	3505	87
11月	44	24	4975	111
12月	45	18	5065	233
1月	16	11	1860	128
2月	35	17	6720	189
3月	17	16	4235	115
合計	311	190	38611	1474
月平均	25.9	15.8	3217.6	122.8

ボランティアセンタールーム本貸出記録

年度	冊数
2013年度	48冊
2014年度	118冊
2015年度	51冊
2016年度	41冊

11. ボランティアセンター取組記録

2016年度

活動タイトル	日程	参加人数
【スタディーツアー】		
気仙沼スタディーツアー	6月3日(金)～6日(月)	12
神戸スタディーツアー	2月26日(日)～28日(火)	16
防災スタディーツアー	3月7日(火)～9日(木)	15
【被災地支援】		
面瀬学習支援：事前調査	7月1日(金)～4日(月)	12
面瀬学習支援：夏	8月16日(火)～24日(水)	24
面瀬学習支援：事前調査	11月25日(金)～27日(日)	10
面瀬学習支援：冬	12月22日(木)～30日(金)	20
面瀬学習支援：春	3月23日(木)～31日(金)	15
はまぎくのつぼみ：事前調査	6月3日(金)～5日(日)	9
はまぎくのつぼみ：夏1クール	8月3日(水)～7日(日)	10
はまぎくのつぼみ：夏2クール	8月25日(木)～29日(月)	8
はまぎくのつぼみ：夏3クール	9月3日(土)～7日(木)	12
はまぎくのつぼみ：水害ボラ	9月11日(日)～16日(金)	7
はまぎくのつぼみ：冬	12月25日(日)～27日(火)	5
はまぎくのつぼみ：春	3月15日(水)～18日(土)	15
はまらいんや：事前調査	7月30日(土)～8月2日(火)	3
はまらいんや：夏	8月28日(日)～9月4日(日)	7
はまらいんや：秋	10月7日(金)～10日(月)	5
はまらいんや：冬	12月25日(日)～29日(木)	7
はまらいんや：事前調査	3月8日(水)～10日(金)	4
はまらいんや：春	3月22日(水)～24日(金)	7
チーム女川：夏	9月11日(日)～14日(水)	7
チーム女川都内活動	8月5日(金)～7日(日)	8
チーム女川都内活動	8月27日(土)～28日(日)	5
チーム女川都内活動	10月8日(土)～9日(日)	2
チーム女川：春	3月11日(土)～14日(火)	1
チームくまもと：事前調査	5月2日(月)～4日(水)	3
チームくまもと：第1弾	5月21日(土)～23日(月)	3
チームくまもと：第2弾	6月18日(土)～19日(日)	3
チームくまもと：第3弾	7月10日(日)～11日(月)	5
チームくまもと：第4弾	8月21日(日)～26日(金)	2
熊本募金活動：学内多摩①	4月26日(水)	32
熊本募金活動：学内多摩②	4月28日(金)	39
熊本募金活動：多摩：4月22日高幡	4月22日(土)	27
【夏ボラ】		
夏ボラ東北学院大学 気仙沼	8月8日(月)～11日(木)	8
夏ボラ東北学院大学 雄勝	8月12日(金)～15日(月)	5
夏ボラ東北学院大学 山元	8月22日(月)～25日(木)	5
夏ボラ東北学院大学 牡鹿	8月27日(土)～29日(月)	7
【クリーン作戦】		
クリーン作戦～春	5月21日(日)	15
クリーン作戦～秋	11月27日(月)	10
クリーン作戦ミニッツ①	5月17日(水)	3
クリーン作戦ミニッツ②	6月20日(火)	1
クリーン作戦ミニッツ③	10月13日(金)	8
クリーン作戦ミニッツ④	11月15日(水)	3
クリーン作戦ミニッツ⑤	12月12日(火)	1
理工クリーン作戦①	5月28日(日)	27
理工クリーン作戦②	10月15日(日)	14
【地域ボランティア】		
ユギ里山①	4月23日(日)	13
夢ふうせん	4月23日(日)	1
落川交流センター	4月24日(月)	3
ひの新選組まつり	5月7日(土)～8日(日)	19
平山小学校	4月26日(水)	4
ユギ里山②	5月14日(日)	2
文京区おちゃっぺ会	5月21日(日)	3
八王子環境フェス	6月4日(日)	5
ユギ里山③	6月11日(日)	3
春日子どもの遊び場	6月11日(日)	3
みんなの遊：友ランド	6月12日(月)	4
熊本街頭募金	6月12日(月)	4
大豆①	6月18日(日)	8

活動タイトル	日程	参加人数
熊本街頭募金	7月1日(土)	4
七夕まつり	7月2日(日)	4
ユギ里山④	7月9日(日)	3
大豆②	7月9日(日)	3
ユギ里山⑤	7月23日(日)	3
せせらぎ	8月7日(月)	2
宝探しIN心の	8月7日(月)	2
大豆③	8月20日(日)	3
湯島ちびっ子広場	8月21日(月)	6
ユギ里山⑥	8月27日(日)	7
大豆④	9月10日(日)	4
文京区おちゃっぺ会	9月10日(日)	3
防災：南平炊き出し	9月11日(月)	5
文京区さきちゃんち☆一周年記念	9月14日(木)	4
スポボラ講習会	9月17日(日)	3
ユギ里山⑦	9月24日(日)	2
落川交流センター	9月25日(月)	1
みんな一緒にの運動会	10月2日(月)	7
文京プレーパーク	10月2日(月)	3
ユギ里山⑧	10月8日(日)	3
多摩療護園秋祭り	10月8日(日)	2
大豆⑤	10月15日(日)	4
ユギ里山⑨	10月22日(日)	4
夢ふうせん	10月23日(月)	4
ごみゼロ収穫祭	11月6日(月)	6
ユギ里山⑩	11月12日(日)	3
文京区ボランティア祭り	11月19日(日)	5
落川ボラ研究会	11月20日(月)	3
チャリティサンタ	11月24日(金)	1
ユギ里山⑪	11月26日(日)	2
ユギ里山⑫	12月10日(日)	3
日野少年学級	12月11日(月)	1
めぐみ野会12月17日	12月17日(日)	1
南平9丁目クリスマス会12月18日	12月18日(月)	1
ユギ里山⑬	1月14日(土)	1
ユギ里山⑭	1月28日(土)	1
ユギ里山⑮	3月11日(土)	1
ユギ里山⑯	3月25日(土)	1
落川交流センター	3月26日(日)	3
【チーム防災】		
BOASI CAFE	7月1日(金)	6
南平高校教員向けHUG訓練	7月6日(水)	5
南平高校生宿泊防災訓練(熊本体験談講演)	7月8日(土)	1
南平高校生徒向けHUG訓練	7月12日(金)	3
日野市民でつくる防災・減災シンポジウム	7月16日(土)	3
カエル・キャラバン講習会	7月30日(土)	6
三中地区青年育成会 宿泊防災訓練(HUG)	7月30日(土)	5
南平6丁目田中自治会防災訓練(地区計画とDIG)	8月7日(日)	4
七生中 宿泊防災訓練	8月26日(金)~27日(土)	4
日野台高校 宿泊防災訓練(熊本体験談講演)	8月26日(金)	1
日野第六小 宿泊防災訓練(カエルキャラバン)	9月3日(土)~4日(日)	3
南平6丁目田中自治会 炊き出し訓練	9月11日(日)	5
七生中 防災講座(熊本体験談)	9月12日(月)	5
学友会主催Cスクエア避難訓練	9月14日(水)	3
平山小学校HUG訓練	10月21日(金)	9
日野市滝合小学校 防災訓練	10月22日(土)	5
日野市総合防災訓練	11月6日(日)	3
公務員になりたい人のための防災・災害講座	11月16日(水)	6
黄色いハンカチ運動(平山苑自治会)	11月20日(日)	6
DIG訓練(ひばりが丘自治会)	11月23日(水)	5
BOASI CAFE	11月30日(水)	8
災害ボランティアセンター立ち上げ訓練(日野VC)	12月14日(水)	6
学生教職員合同研修①	12月16日(金)	6
学生教職員合同研修②	1月13日(金)	12
【外部イベント】		
東北学院大学ボランティアシンポジウム	12月10日(土)	4
Gakuvo事業報告会	2月4日(土)~5日(日)	7
イオン写真展	2月8日(水)~12日(日)	49
全国少年消防クラブ指導者講習会	2月19日(日)	7
合計		799

12. 協定・助成金

(1) 協定

- 2014年3月12日「日本財団学生ボランティアセンター」との間で「学生ボランティア活動推進」に関する協定の締結

(2) 助成金

- 住友商事平成27年度「東日本再生コースチャレンジ・プログラム」活動・研究助成Aコースに採択
対象団体：被災地支援学生団体「面瀬学習支援」の活動

13. メディア掲載

1. 大学関係広報誌

(1) HAKUMON Chuo

ボランティアの現場で養う公務員視点 (2016年夏号)

(2) 中央評論 298号

中澤秀雄・松本真理子 支援ボランティアのいま—中央大学の事例
 中澤秀雄 東日本大震災後のリワイアリングと公共性

(3) 草のみどり

- 春の東北ボランティア活動を行いました (7月号)
- チームくまもと継続的に活動しています・災害救援ボランティア講座 (11月号)
- 復興支援インターンに参加して 篠崎 泉 法学部法律学科二年 (5月号)
- 東北を知り、私を知った森の防潮堤ボランティア 合田明弘 理工学部都市環境学科3年 (7月号)
- 「知る」「考える」「伝える」からはじまる防災——「チーム防災」の活動から
 西沢 栞 総合政策学部国際政策文化学科4年 (9月号)
- 地域の多様性～宮城県女川町との出会いから 稲吉華那 理工学部都市環境学科4年 (11月号)
- 気仙沼での4年間で私に教えてくれたこと ～ボランティアとしての心構え～
 手塚 文裕 法学部法律学科4年 (1月号)
- 気仙沼と熊本、2つの被災地の間で 木村 亘佑 法学部国際企業法関係学科2年 (3月号)

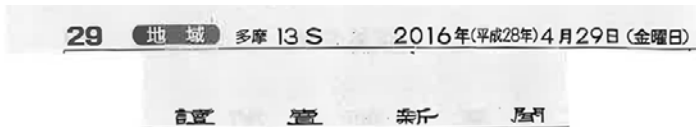
HAKUMON Chuo 2016冬



2. 新聞記事・広報誌等

熊本支援へ一致団結 中大サークルなど慈善イベント	読売新聞	4月29日版
ひの新選組まつり熊本募金	広報ひの	6月1日版
日野市_ボランティアインフォメーション熊本募金	日野市ボランティア・センター	6月号
「東北の思いを熊本へ」、中央大学の熊本出身学生らが4度目のボランティア	大学ジャーナルオンライン	8月6日版
また一緒に遊ぼうね 中央大学生児童と交流	岩手日報	8月6日版
楽しくフェンシング 中央大学 面瀬小で夏期学習支援	三陸新報	8月23日版
足湯でお年寄りと交流 中央大生 西原村の仮設住宅	熊本日日新聞	8月24日版
中高生に進路指導 気仙沼地方で初企画	河北新報	9月26日版
協働団体紹介	ひの市民活動連絡会NEWS	11月25日版
フミコんだことがネットワーク強化に	文京区社会福祉協議会だより	1月号
災害ボランティアセンター立ち上げ訓練	ひの社協だより	2月号
Campusインフォメーション	東京新聞	2月4日版
ショッパーズ(日野版) イオンイベント(パネル展)		2月10日版
イオンイベント	読売新聞	2月12日版
復興へのチャレンジ はまぎくのつぼみ	ほっとすまいる	3月号
被災の故郷 見つけた夢	読売新聞	3月15日版

2016.4.29 読売新聞_GWイベント





イベントに参加予定の中央大応援団チアリーディング部(中央大ボランティアセンター提供)

GWイベント・来月1日

熊本支援へ

一致団結

町田のスポーツ選手ら

町田市に本拠を置くスポーツチームや町田市出身の選手たちが一致結束して来月1日、小田原・JR町田駅周辺で、熊本地震の被災地に向けた募金活動を繰り広げる。市と市議会スポーツ振興課

街頭募金

県連盟の呼びかけに応じて参加するのは、FC町田ゼルビア(サッカーJ2)、キヤノンイーグルス(ラグビートップリーグ)、ASVベスカドール(フットサルFリーグ)の3チームと、桜葉林大ソングリーディング部「CREAM」、玉川大学ストリートチーム「JURIA S」の2大学チーム、大相模郡下の若原さんら。当日は午前10時、小田原町田駅東口のカリヨン広場で石坂丈二市長あいさつし、午後3時まで、買い物客でにぎわう日曜の繁華街に繰り出す。アクションなほは行わず、日本赤十字社の募金箱を手に、ひたすら市民の協力を呼びかけよう。

市のスポーツ団体と選手が結束して募金を行うのは、東日本大震災以来」と話している。

中大サークルなど 慈善イベント

中大を始めとした学生生の団体、パフォーマーによるチアリーディングイベントが来月1日、日野市多摩平のイオンモール多摩平の森で開かれる。中央大ボランティアセンターが学生たちを呼びかけたところ、賛同するサークルが相次いだ。中央大の太鼓サークル「鼓太」、タップダンスサークル「Freelike」、アカベラサークル「It's your voice」が被災地への思いを込めて、募金が応援団のリーダー、チアリーディング部のメンバー、パフォーマーによるチアリーディングイベントが来月1日、日野市多摩平のイオンモール多摩平の森で開かれる。中央大ボランティアセンターが学生たちを呼びかけたところ、賛同するサークルが相次いだ。中央大の太鼓サークル「鼓太」、タップダンスサークル「Freelike」、アカベラサークル「It's your voice」が被災地への思いを込めて、募金が

運送入タツには法政大 明星大ボランティアセンターと合わせ、会場で被災地への支援を呼びかける。集まった募金は、イオンモールを通じて熊本県に寄付される。

イベントコーディネーターの関澤裕美さん(40)は「学生たちの間に自分たちだけでできるとは思わなかった」といふ笑顔が浮かぶ。呼びかけの準備を促している」と来場を呼びかけている。イベントは午前11時から午後5時まで、同モール隣センターコートで、入場無料で出入りも自由。

2016. 8. 6 岩手日報



2017. 2. 12 読売新聞_イオンイベント



2016. 8. 23 三陸新報_面瀬フェンシング



楽しくフェンシング

中央大学の被災地支援プロジェクト「面瀬フェンシング」が21日、気仙沼市立面瀬小学校で子供たちを対象にしたフェンシング教室を開いた。

面瀬学習支援は、学生が東日本大震災の翌年から同地区の子供たちを支援するため、夏グロボが所属する気仙沼市立面瀬小学校で子供たちを対象にしたフェンシング教室を開いた。今回は18日から16人が参加した。指導には同大学の夏グロボ(21)が担当した。

初めて競技にふれる子供も多く、遊びも取り入れた指導を楽しんだ。6年の黒山小町さんは「フェンシングは初めてで、難しいとは思っていたけど体験したらおもしろかった」と話した。

面瀬学習支援の大谷夏グロボ(21)は「継続して面瀬に来ることで、子供たちが息抜きできる場所を提供できれば」と話していた。

同大学からは卓球同好会も訪れ、面瀬中卓指導致員が22日に行った。

小学生が楽しくフェンシングに触れた

2017. 3. 15 読売新聞夕刊 (大上君)

読売新聞(東京)夕刊
YOMIURI SHIMBUN TOKYO (EVENING)
2017.3.15

被災の故郷 見つけた夢

避難所の美容師さん憧れて

いつか 新幹線で笑顔運ぶ

美容師の大上君が、被災地の故郷を見つけた。憧れていた美容師の夢を叶え、笑顔で新幹線を走る。被災地の復興に貢献したいという思いで、美容師として活動している。故郷の復興に貢献したいという思いで、美容師として活動している。

3. メディア放送

ラジオ放送
J-WAVE JAM THE WORLD 2月7日 松本真理子インタビュー

14. 作成物掲載

1. 刊行物

2015年度版ボランティアセンター報告書
2016被災地支援学生団体ネットワーク紹介冊子
2016ボランティアセンターリーフレット
CVCだよりVol.4～Vol.7

2. ポスター・チラシ

クリーン作戦・春の陣・秋の陣
ボラカフェ
公務員になりたい人のためのボランティア講座
ボランティア写真展
キャンパスライフ体験会
大学生ボランティア活動報告&防災イベント
被災地スタディーツアー
学生×教職員合同防災研修

15. ボランティアセンター組織規約

中央大学ボランティアセンター及びボランティアセンター運営委員会設置要綱

(設置)

第一条 中央大学学生部内にボランティアセンターを置く。

(目的)

第二条 ボランティアセンターは、中央大学学生のボランティア活動を促進し支援することを目的とする。

(センター長)

第三条 ボランティアセンターにボランティアセンター長を置く。

2 ボランティアセンター長は、本学専任教員の中から、学生部長の推薦に基づき学生部委員会に諮って、学長が委嘱する。ただし、学生部長は、推薦に先立ち、当該専任教員が所属する学部長又は大学院研究科長と事前に協議するものとする。

3 ボランティアセンター長の任期は二年とし、再任を妨げない。

(運営委員会の設置)

第四条 中央大学学生部内に中央大学ボランティアセンター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会は、第二条の目的にのっとり、ボランティアセンターの運営について審議決定する。

(運営委員会の構成)

第五条 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 一 ボランティアセンター長
- 二 学生部委員の互選による者一人
- 三 各学部教授会で互選した者 各一人
- 四 学生部事務長及び学生課長
- 五 学生部長が指名する者 若干人

2 運営委員会は、必要に応じ、委員以外の者の出席を求めて、その意見を聴くことができる。

(運営委員長)

第六条 運営委員会の委員長は、ボランティアセンター長をもって充てる。

2 委員長に事故があるときは、前条第二号及び第三号の委員の互選により、その代行者を定める。

3 委員長は、運営委員会を招集し、議長となる。

(運営委員の任期)

第七条 第五条第一項第三号に定める委員の任期は二年とし、再任を妨げない。

(運営委員会の任務)

第八条 運営委員会は、第二条の目的を達成するため、次の事柄について検討し、必要な施策を実施する。

- 一 中央大学学生によるボランティア活動の促進と支援
- 二 ボランティア活動に関連する正課教育や関係部課室との連携
- 三 その他、目的達成のために必要な施策

(事務所管)

第九条 運営委員会に関する事務は、学生部事務室学生課が所管する。

附則 この要綱は、平成二七年四月一日から施行する。

2016年度ボランティアセンター運営委員

区分		所属	氏名
一号委員	ボランティアセンター長（運営委員長）	法学部	中澤 秀雄
二号委員	学生部委員の互選による	法学部	中澤 秀雄
三号委員	各学部教授会で互選した者	法学部	平山 令二
		経済学部	丸山 佳久
		商学部	中村 亨
		文学部	山科 満
		理工学部	田口 善弘
		総合政策学部	加藤 久典
四号委員	学生部事務長	学生部事務室	山ノ井 和哉
	学生課長	学生課	石橋 敦史
五号委員	学生部長が指名する者	学生課	松本 真理子
	学生部長が指名する者	学生課	開澤 裕美

ボランティア情報の取扱いに関する方針

中央大学ボランティアセンターでは、以下に該当する募集团体の活動を、学内掲示板、ファイル閲覧、ML、コーディネーターによる相談業務を通じて、学生に広くボランティア活動の情報提供をしております。

- 1) 公益性・公共性が高い活動
- 2) 営利を目的としない活動
- 3) 活動にあたり、安全性が高いと判断される活動
- 4) 受け入れた学生に対し、教育的に配慮を伴った対応をする活動

つきましては、下記項目に同意の上、情報提供いただけますようご理解のほどお願いいたします。

なお、情報提供にともなってなされた一切の行為とその結果については、参加者募集を希望した団体において責任を負っていただけますようお願い申し上げます。

情報提供につきましては、中央大学ボランティアセンターで所定の審査のうえ決定いたします。提供の可否または提供予定日についてはご連絡いたしませんのでご承知おきください。また、学生の自主的な思いで活動を選択することになりますので、募集をしました件につきまして活動者が必ず見つかるとは限りませんのでご理解ください。

御団体から提供いただきました個人情報につきましては、中央大学ボランティアセンターにて活動情報の提供の目的にのみ使用させていただきます。

1. ボランティア募集の受付

- ▶ ボランティアセンターに電話・E-mail等で情報募集チラシ等の設置、募集内容についてご連絡ください。受付時に簡単な聞き取り調査をさせていただきます)
- ▶ ボランティアセンターから、E-mailもしくは郵送で「団体登録票」をお送りします。
- ▶ ご記入いただいた「団体登録票」と一緒に、団体概要パンフレット、担当者の名刺、情報募集チラシ等を郵送、もしくはセンターに直接お持ちください。
- ▶ 登録完了後、ボランティアセンターにて、お預かりしたボランティア情報をポスターやチラシ等で周知します。

2. ボランティア募集を行う団体・活動の選定基準

- 1) ボランティア募集を行う団体の範囲
活動分野や範囲、法人格の有無は問いません。
例) ボランティア・市民活動団体（任意団体、NPO）、社会福祉法人、医療法人、学校法人、社団法人や財団法人等の公益法人、国や地方自治体、独立行政法人、国連機関、大使館、企業（非営利による社会貢献活動に限ります）、労働組合など
- 2) ボランティア募集团体の受入れ体制について
 - ✓ ボランティアの募集や受入れの担当者が明確であること
 - ✓ 有償活動とボランティア活動を明確に区別していること
- 3) 以下に該当するボランティア活動は、受付できません
 - ✓ 政治的・宗教的活動に関する内容の場合。特定の政治組織や宗教団体への加入を強要・勧誘するような活動に関する内容の場合
 - ✓ 日本国または国際法上の法令に抵触する場合
 - ✓ 公序良俗に反する、または犯罪的行為を誘発するおそれのある内容の場合
 - ✓ 第三者に損害または不利益を与えたり、第三者を誹謗中傷する内容の場合
 - ✓ 情報が虚偽または誇大の内容の場合

15. ボランティアセンター組織規約

- ✓ 情報に関する責任体制が明確でない場合
- ✓ 精神的・肉体的苦痛が心配される場合
- ✓ 水泳監視・ベビーシッター・病人の介護等の人命にかかわることが予想される場合
- ✓ 車の運転が活動の内容に含まれる場合
- ✓ 宿泊を伴う場合（キャンプボランティアなど、適切に夜間睡眠が確保される場合についてはこの限りではない）
- ✓ 本来有資格者によってなされるべき活動の場合
- ✓ その他不適当だと判断されたもの

3. ボランティア受入れ団体との申し合わせ

ボランティア受入れ団体と中央大学ボランティアセンターとは、以下の点を申し合わせ事項として確認いたします。

- ✓ 申込をした学生に対し活動内容や条件等を提示し、その内容について両者の間で合意の上、活動をはじめること
- ✓ 活動をはじめの前には、オリエンテーション等を実施し、活動に必要な情報や留意点をあらかじめ伝達し、活動がはじまった後は、必要に応じて研修や支援等をおこなうこと
- ✓ ボランティア活動中は、各団体ボランティア担当スタッフとともに活動をおこなうこと
- ✓ 申込をした学生が適切なボランティア保険に加入済みであることを確認してから活動を始めること。ボランティア保険に未加入の場合は、申込を受け付けないこと
- ✓ 活動時間は、休憩を入れて1日8時間、週28時間を超えないこと（外国人留学生の資格外活動における就労時間に準拠）
- ✓ 夜10時以降の深夜活動をさせないこと

4. 免責

ボランティアセンターで紹介するボランティア情報に関して、発生したトラブル等に対してセンターでは責任を負いかねます。予めご了承ください。

以上

団体登録シート

団体名 (正式名称)	※当てはまるものに○をつけてください NPO 法人 ・ 社会福祉法人 ・ 公益財団/公益社団法人 ・ 一般財団/一般社団法人 学校法人 ・ 任意団体 ・ 学生団体 ・ 行政 ・ その他 ()
	ふりがな
住所	〒
担当者名	ふりがな
連絡先	TEL E-mail
団体の説明	1) 設立年月日
	2) 活動分野 (当てはまるものに○をつけてください) 環境 ・ 国際 ・ こども/青少年 ・ 福祉 ・ 文化/芸術 ・ 地域/まちづくり スポーツ ・ その他 ()
	3) 団体のミッション (設立趣旨)
	4) 主な活動内容
	5) 主な活動場所 <最寄駅>
	6) 中央大学の学生ボランティアの受入れ経験の有無 有 ・ 無 (有の場合: 約 人)
ボランティア 保険	※当てはまるものに○をつけてください 団体により加入する ・ 個人で加入する必要あり

事務局記入欄 受付日 年 月 日 ()

2016年度 中央大学ボランティアセンター報告書

発行	2017年7月14日
発行者	中央大学ボランティアセンター 〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1 Tel: 042-674-3487 Fax: 042-674-3469 E-mail: chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp http://www.chuo-u.ac.jp/usr/volunteer/
印刷	明誠企画株式会社



発行日 2017年7月14日
発行者 中央大学ボランティアセンター